

高知市文化財調査報告書第18集

介 良 遺 跡 Ⅱ

介良川都市小河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2集

1998.6

高知市教育委員会

介良遺跡II報告書正誤表

本文

ページ	行	項目	誤	正
5		第3図	客I	客土
		第3図	SD301埋I	SD301埋土
7	8~9		(80~85・87・90・91・93)	(80~85・87・88・90・91・93)
19		スケール	5 cm	10 cm
21	30		163	162
22	5		168	169
22	5		179	トル
	9		ナゲ	ハケ
23		第19図	SD102	SD103
25	2		貼付口縁をもち	175は貼付口縁をもち
26	4		V層	V層
28		第25図	154	トル
29	7		口縁部のない外面に	口縁部の内外面に
	11		口縁端部付近にハケを	口縁端部付近にナゲを
29	17		天井部付近に絞り目が残る	トル
	23		1	268
	24		2	266
	25		3	269
	27		4	270
32	10		234	233
	11		234	233
33	1		SD202	SD102
	3		SD102がSD202に	SD103がSD102に
	5		112	152
33	5		扁平片刃石斧	扁平片刃石斧
34	1		多く含むが纏層	多く含む纏層
34	14		1	1
36	3		251~258は	250~253は
	3		252	251
	5		ナゲ	ヘラケズリ
38	1		から	~
55	12		早天	早天

観察表

ページ	図番	項目	誤	正
45	84	成形・文様・調整	成形・文様・調整(外面/内面)	タタキ/ハケ
49	183	色調	色	明赤褐色/明紫褐色
52			(石器)	石器観察表

介 良 遺 跡 II

1998.6

高知市教育委員会

序

水稻耕作が本格的に始まる弥生時代以降は、全国的にも低湿地に集落が立地するようになります。鏡川の沖積平野上に立地する高知市内の平野部でも、弥生時代から古墳時代にかけて周辺部から次第に本格的な定住が始まったことをうかがわせる遺跡が発見されるようになってきました。今回調査された介良遺跡は、朝倉地区に存在する柳田遺跡とともにそのような遺跡の代表的なものです。

高知市では「ふるさとの川モデル事業」として介良地区において、自然環境と調和のとれた開発を行うことになりました。この事業にともなう、事前調査として今回の発掘は実施されました。介良地区は古代の史料「和名類聚抄」以来多くの文献に登場する歴史の古い地域ですが、高知市教育委員会では先に「高知市文化財調査報告書第9集」として同地区的調査結果をまとめています。今回の調査が高知市及び介良地区の歴史や文化財についての理解をさらに深める一助となれば幸いです。

最後になりましたが発掘調査にかかわられた方々にお礼申し上げますとともに、関係各機関のご理解とご協力に感謝いたします。

平成10年6月 高知市教育委員会

例　　言

1. 本報告書は高知県高知市介良に所在する「介良遺跡」の発掘調査報告書である。平成8年度調査は(財)高知県埋蔵文化財センターが行っており、「介良遺跡」として報告されているため、今回の報告書の表題を「介良遺跡II」とした。
2. 発掘調査は高知市下水道部河川水路課が四国土建株式会社に委託し、高知市教育委員会が一般的な指導を行った。
3. 発掘調査は1997年10月20日から翌年2月27日まで行った。整理作業は1997年10月25日から1998年6月30日まで現地で行った。遺物は高知市教育委員会で保管している(遺物の注記はKK-97とした)。
4. 本書の編集は高知市教育委員会総括の下、編集全般を松田が行つた。また、整理作業・編集に武石隆義、森岡和信の協力を得た。本文は第I章及び第II章第2節4区の調査を田上、それ以外を松田がそれぞれ執筆した。
5. 発掘調査及び整理作業において下記の方々の協力を得た。(順不同・敬称略)
発掘調査: 大石喜久、北添隆清、北村光亀、坂本彰男、島津忠利、武内義巧、竹村達臣、土居一彦、西内孝明、浜田豊、廣光忠重、福留博、森英郎、森尾尊、森岡和信、山地福男、井上能子、岡村好子、岡本良子、門田信子、門田美智、小松喜美、竹村君子、田中和子、徳久道子、山木栄子、横田繁子
整理作業: 足達智代、池本千鶴、伊藤民、井上華代、入野光代、佐田笑子、島崎美恵子、島津清代香、西森千枝、野中朋子、畠平裕美、福富宣子、松村文枝、矢野睦子
発掘調査掘削工事 (有)共運工業
航空測量 (株)アイシー
木製品保存処理 (株)吉田生物研究所
6. 発掘調査並びに報告書作成に当たり、下記の諸氏・諸機関から助言、教示を賜つた。記して感謝したい。(順不同・敬称略)
森田尚宏、出原恵三、前田光雄、吉成承三、坂本憲昭、高知県教育委員会文化財保護室、(財)高知県埋蔵文化財センター

本文目次

序・例言

目次〈本文目次・挿図目次〉

第Ⅰ章 調査に至る経過 1

第Ⅱ章 遺跡の概要と層序 4

 第1節 遺跡の概要 4

 第2節 基本層序 4

第Ⅲ章 調査の結果 6

 第1節 1~3区の調査 6

 第2節 4区の調査 39

遺物観察表 41

第Ⅳ章 おわりに 54

写真図版 57

報告書抄録 85

挿図目次

第1図	周辺の遺跡	2
第2図	調査区配置図	3
第3図	基本層序	5
第4図	SR201遺物出土地点	7
第5図	SR201出土遺物（土器）一壺・甕①	8
第6図	SR201出土遺物（土器）一壺・甕②	9
第7図	SR201出土遺物（土器）一甕①	10
第8図	SR201出土遺物（土器）一甕②	11
第9図	SR201出土遺物（土器）一壺	12
第10図	SR201出土遺物（土器）一鉢	13
第11図	SR201出土遺物（土器）一部	14
第12図	SR201出土遺物（土器）一高坏	15
第13図	SR201出土遺物（土器）一V層	16
第14図	SR201, SD102出土遺物（石器）	17
第15図	SR201出土遺物（木器）一①	18
第16図	SR201出土遺物（木器）一②	19
第17図	SR201出土遺物（木器）一③	20
第18図	SD201出土遺物	22
第19図	SD101, 102, 201遺物出土状況・土層図測点	23
第20図	SD201遺物出土状況	24
第21図	SD202遺物出土状況	24
第22図	SD202出土遺物（土器）	25
第23図	SX201出土遺物（土器）	26
第24図	SX201出土遺物（木器）	27
第25図	SX201遺物出土状況	28
第26図	SR202土層図	29
第27図	SR202出土遺物（土器）	30
第28図	SD101, SR202, SX201平面図・土層図測点	31
第29図	SD101出土遺物	32
第30図	SD101上層図	33
第31図	VI層分布範囲・堆積状況	34
第32図	VI層出土遺物	35
第33図	III層出土遺物（土器）	36
第34図	III層, SR202, SD202出土遺物（木器）	37
第35図	II層出土遺物	38
第36図	4区出土遺物	39
第37図	4区平面・土層図	40

第Ⅰ章 調査に至る経過

高知市教育委員会では、高知県教育委員会の協力を得て、平成3年度に市内の詳細遺跡分布調査を実施した。その際に発見された遺跡の一つが介良遺跡であり、弥生時代以降現代までの遺物がほぼ連続して散布する複合遺跡である。

この度、高知市では市民に親しまれる良好な水辺空間を形成するために、「ふるさとの川モデル事業」として、遺跡の東端を流れる介良川の改修及び親水公園の整備を行うことを計画した。この計画を受けて、文化財保護の担当部局である高知市教育委員会と河川改修の担当部局である高知市下水道部との間で協議がもたれ、計画地内において遺構・遺物の有無を確認するため、高知市教育委員会では高知県文化財団埋蔵文化財センターの協力を得て、事前の試掘調査を行った（平成7年度調査）。

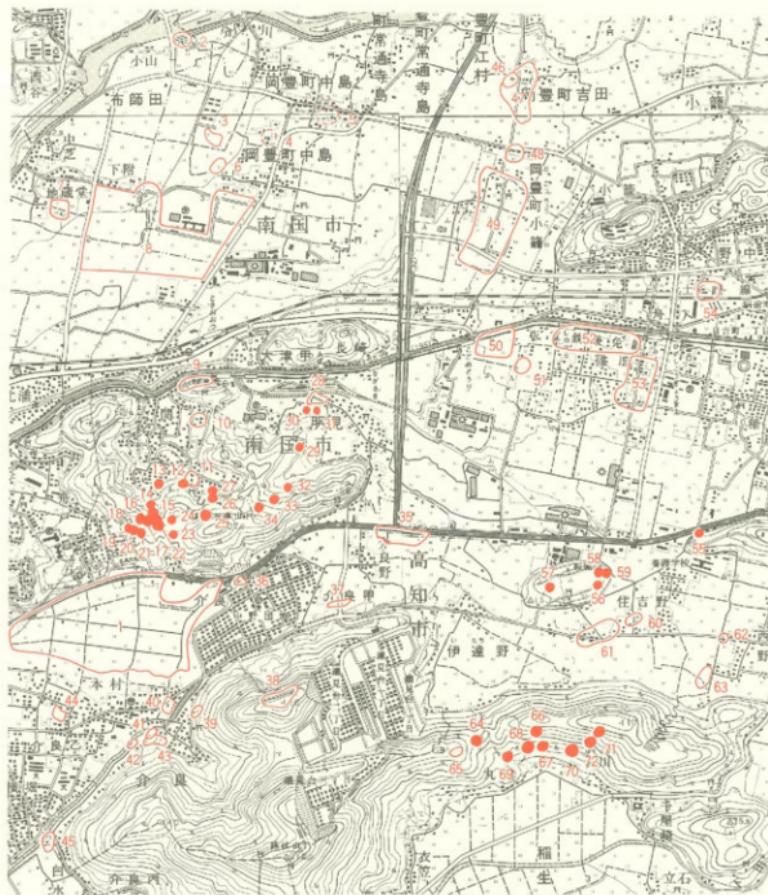
確認調査においては、明確な遺構は検出できなかったが、介良川の流路に近い部分において、弥生時代から古墳時代を中心時期とする土器や木器などの遺物が多量に出土し、特に木器は低湿地であるため良好な残存状況であった。この結果を受けて、再度両者の間で協議がもたれ、工事計画地のうち、介良川の流路に近い約1万2千m²について記録保存を目的として本格的な発掘調査が行われることとなり、平成8年度には調査対象地のうち約3千m²を埋蔵文化財センターに委託して調査が行われた。今回の調査（平成9年度調査）は8年度調査地に接する4,420m²の部分を対象として平成9年9月17日～平成10年6月30日までの間に行われた。

平成9年度の調査体制は以下の通りである。

事業主体及び事務	高知市下水道部河川水路課
調査主体及び事務	高知市教育委員会社会教育課

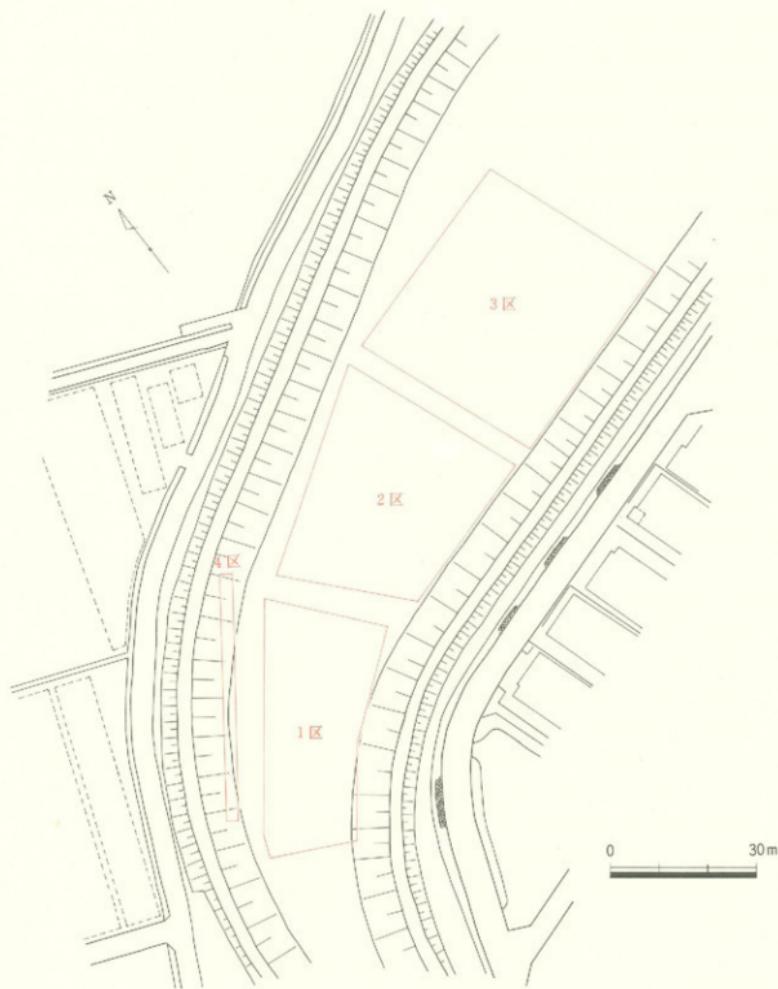
現地での調査は以下の体制で行われた。

調査員	田上 浩 (高知市教育委員会社会教育課)
	武石隆義 (同 上)
調査補助員	松田重治 (四国土建株式会社)
発掘現場管理	豊永主政 (同 上)



図番	遺跡名	図番	遺跡名	図番	遺跡名	図番	遺跡名	図番	遺跡名
1	介良遺跡	16	高麗原1号古墳	31	明見山古墳	46	吉田十居遺跡	61	野泽古墳群
2	高麗原2号古墳	17	高麗原3号古墳	32	猪首山古墳群	47	吉田遺跡	62	神田遺跡
3	中島田遺跡	18	高麗原4号古墳	33	猪首山古墳	48	小瀬七呂城跡	63	茶田溝跡
4	中島田城跡	19	高麗原5号古墳	34	猪首山古墳	49	小瀬遺跡	64	塙ノ松木
5	中島田原城跡	20	高麗原6号古墳	35	猪首山古墳	50	志兵衛遺跡	65	丸山五輪塔
6	カクダ池遺跡	21	高麗原7号古墳	36	志兵衛遺跡	51	北山遺跡	66	海津原1号古墳
7	高麗原1号城跡	22	高麗原8号古墳	37	今井山古墳	52	前吉之又遺跡	67	大谷古墳
8	3丁の遺跡	23	高麗原9号古墳	38	今井山	53	二ノ城遺跡	68	馬糞寺古墳
9	大津城跡	24	高麗原10号古墳	39	御嶽原2号古墳跡	54	唐中城古跡	69	山下大城
10	大津金子遺跡	25	三塚上古墳	40	御嶽原3号古墳	55	丹波山古墳	70	馬糞古墳
11	高麗原生石遺跡	26	三塚中古墳	41	佐和城跡	56	住吉山1号墳	71	井川101号古墳
12	小森路古墳	27	三塚下古墳	42	佐和山跡	57	住吉山2号墳	72	井川102号古墳
13	六郎山古墳	28	竹の渡遺跡	43	西の谷遺跡	58	住吉山3号墳		
14	高麗原山古墳	29	明治淀山古墳	44	今井山遺跡	59	住吉山4号墳		
15	高麗原1号古墳	30	明治淀山2号墳	45	今井山水古墳	60	孟戸遺跡		

第1図 周辺の遺跡



第2図 調査区配置図

第II章 遺跡の概要と層序

第1節 遺跡の概要

今年度の調査範囲は前年度の調査区に北接する位置にある。南北約150m、東西約40mの調査対象地を三分割し、南端を1区、中間を2区、北東端を3区として調査を行った。

当遺跡において、時期を特定できるもっとも古いものは弥生時代終末～古墳時代初頭頃を中心として流れている自然河川（SR201）、SR201へ流入するSR202、溝状遺構であり、SR201から流出するSD201、作業場に当たると考えているSX201がある。SR201、202は現在、調査区の南を流れている介良川の旧河道に当たると思われるものである。

出土する土器を中心とした遺物の状態等から弥生時代終末～古墳時代初頭にかけてのSR201は流速も遅く、埋没後も湿地帯として不安定な状態が長く続いていると考えられる。

いずれにしてもSR201はこの付近に存在するであろう集落の生活用水摂取に欠かせない場所であったと同時に2区の中心部を中心としたあたりが河川祭祀後に土器を一括投棄した場所として、あるいはゴミ捨て場として機能したと思われる。

SX201は人頭大の角礫や杭で木材を固定するような配置やそこに水を引くためと考えられる小水路等から作業場であったと思われる。しかし、出土遺物やその出土状況から祭祀遺構とは考えられず、むしろ日々の生活に密着した場所を想定している。

古代から中世にかけては溝状遺構が1条存在するのみであるが、上面かなりを削平されている。出土遺物も細片が多く、特筆すべきこともない。

第2節 基本層序（第3図）

当遺跡における基本層序は大きく7つに分けられる。

I層 客土である。上半は雑草等による擁擠がみられ、土壤化している。

II層 古代から中世の遺構埋土・包含層である。

III層 弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構埋土・包含層である。SR201外においてこの層から若干の須恵器の出土がみられ、この層が前年度の調査で須恵器が多く出土したIX層^{a)}に相当すると思われる。長期間、この地が湿地帯であったことを示すものであろう。

IV層 基本的にはIII層であるが、埋土中に植物遺体を多く含むためにあえて分層した。

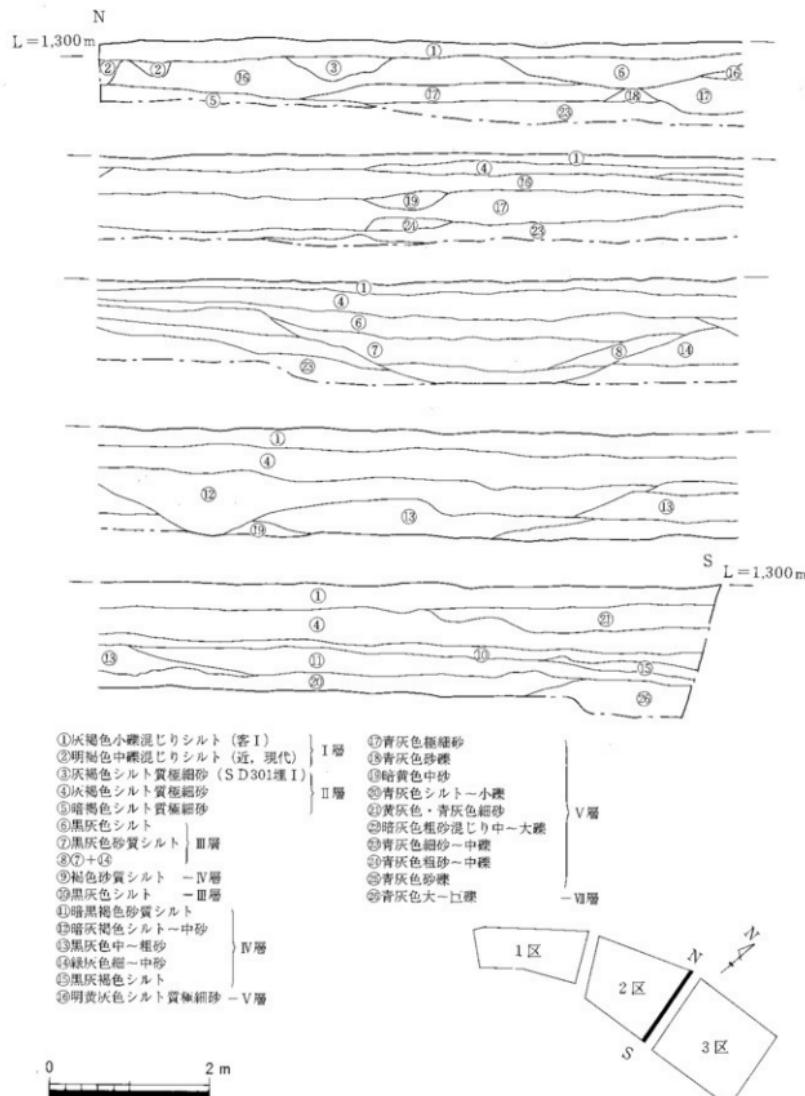
V層 グライ化した極細砂層である。弥生時代後期以降の地表面である。

VI層 3区北東端のみで確認できる洪水礫層である。弥生前期末の遺物を多く含む。

VII層 ベースになる礫層である。

参考文献

- (1) 坂本憲昭・田坂京子 1997.3 『介良遺跡』 (財)高知県埋蔵文化財センター



第3図 基本層序

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 1~3 区の調査

1. 弥生時代終末から古墳時代前期の遺構と遺物

Ⅲ層及びIV層を包含層とするこの時代は後述する古墳時代前期とともに本遺跡における調査の中心となった時代であり、体部にタタキメを持ついわゆる「ヒビノキ式」と呼ばれる土器が多く出土する。一口にヒビノキ式といつてもその範囲は広く、Ⅰ~Ⅲ式に細分されることは周知の通りであるが、今回の調査ではそのいずれもが広く出土するとともに、それよりもやや新しい時期のものも同層から出土する。

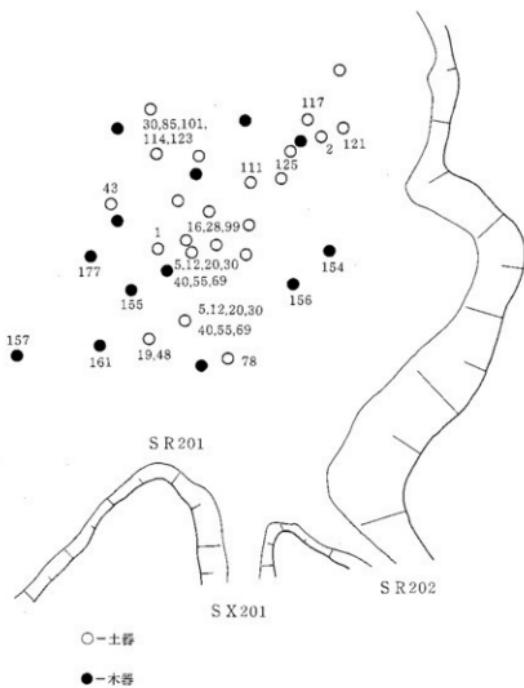
SR201（第4~17図）

この時代の中心となる遺構である。SR201は2区と3区の境界あたりから現れ、弧を描くように広がって1区の中央やや南よりへと逃げてゆく自然河川である。土層堆積や出土遺物の状況を見る限り流速は決して早くなく、むしろ湿地帯のような状況を呈していたものと思われる。第4図で示した範囲に遺物が集中しており、これらの状況を考えあわせるとこの場所が付近で営まれていた集落のゴミ捨て場として機能していたと同時にとあわせて河川祭祀後の一括投棄であろう。遺物の時代幅から見て一度に止まらず何度か行われた可能性が高い。土層はⅢ層およびIV層が厚く堆積しているが、遺物はこの2層の境目およびIV層・V層の境目からの出土が中心である。また、V層中に遺物を含んだⅢ・IV層が混淆している場合も多く、この状態が下層のベース（VII層）の上面まで続く。

Ⅲ・IV層の出土遺物は今年度の調査も前年度と同様出土遺物中に占める甕の割合が大きくなっている。甕の大半が体部にタタキを施すものである。体部上半のタタキの方向にも23・27などのように横方向のタタキメをもつもの、20や22のように斜め方向のタタキをもつものの他、縦方向のタタキメをもつ34もみられる。タタキの他では外面にハケを施す(47)ものがある。また4の底部や11・29の口縁部のようにタタキメをハケで消すものも見られる。内面の調整はハケがほとんどであるが、12のように口縁部にハケ、体部はナデというものも見られる。その他5・9のように口縁部から底部まで観察できる個体ではタタキの方向の変化から分割成形を見ることができるものもある。

壺も同様に体部上半で1・8・75のような横方向のタタキ、60・61のような斜め方向のタタキを施すものがある。また、1・61はタタキメをハケで消している。54・55は小型丸底壺であるが、形態的に相違点がある。両者とも丸底ではあるが、頸部から底部にかけて54は弧を描くように丸くなっているが、55は直線的である。

壺は種類も豊富で、1・2・51・52・57~61・64・67・70・75のような短頸の広口壺、71のような広口壺、3・4のような直頸壺、そして前述の小型丸底壺がある。その他、56・66・73・74は混入品、65・68は貼付口縁をもつ広口壺であり、混入品の可能性があるが、65の胎土や色調がこの時期の他

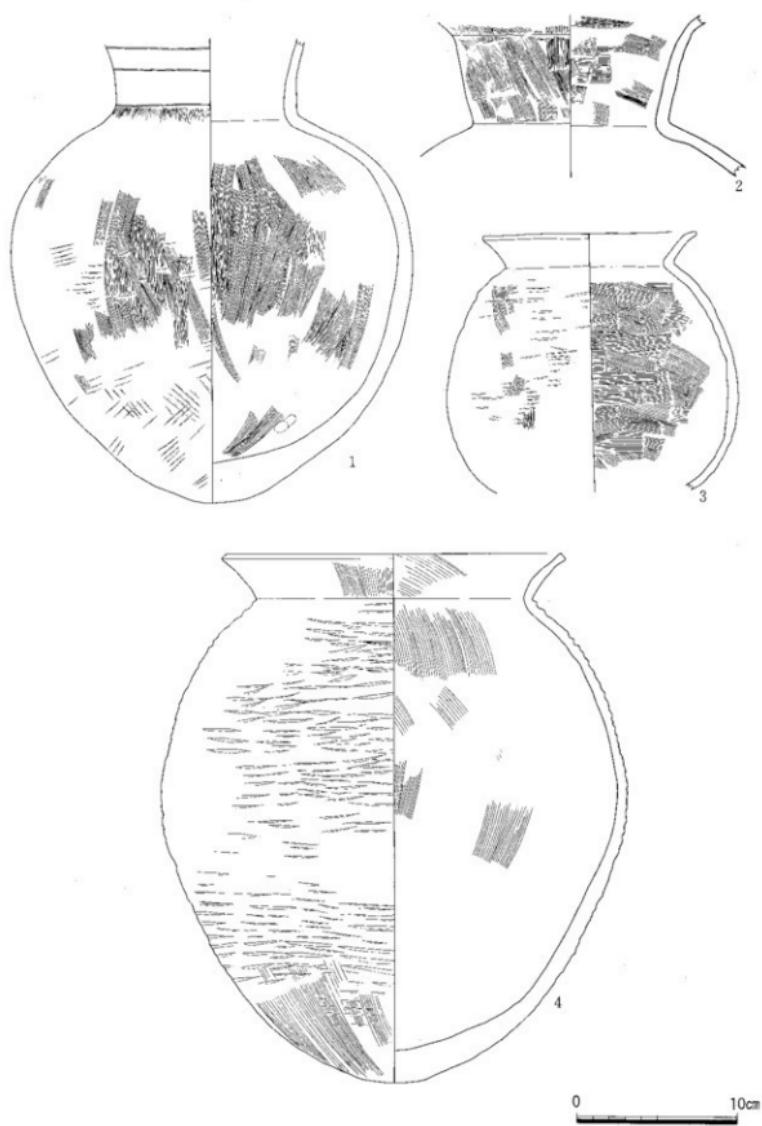


第4図 SR201 遺物出土地点

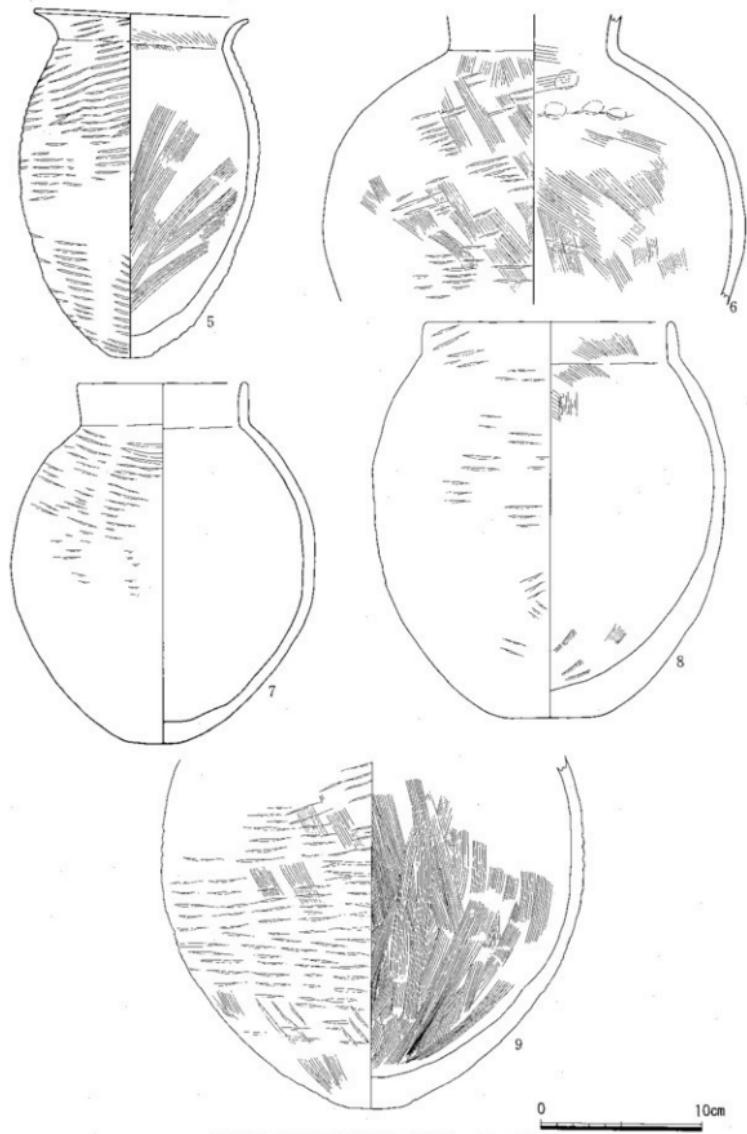
の遺物と酷似しており、時期を決定しかねている。72は口縁端部に竹管文をもつ甕であり、これも混入品である。

鉢は大半が楕のような形態をなすものである中で83のように端部が外反するもの、手捏ね土器のような外面を指頭圧で形成するもの(81)も存在する。内面はハケ・ナデで丁寧に仕上げるが、外面は粗雑である。他に76・77が手捏ね土器である。

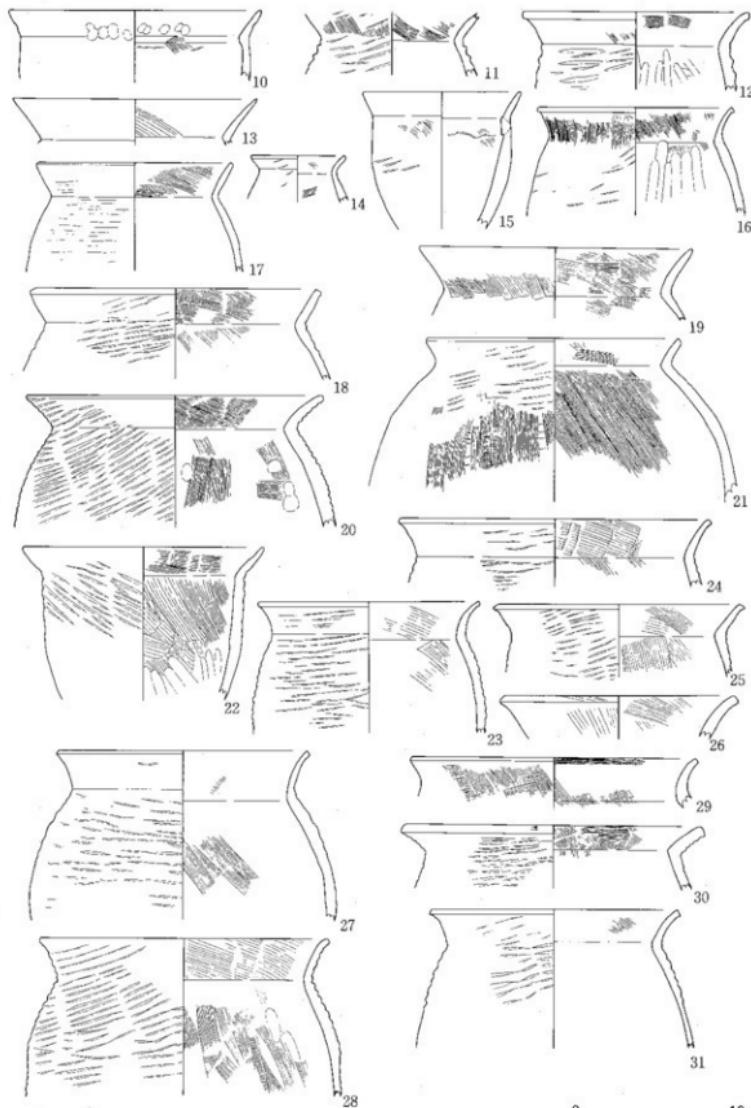
外面には壺・甕と同様タタキメを残すものが多く見られ、それにも横方向(78・88)と斜め方向(84・86・91)がある。また、タタキのあとにハケを施すもの(86)やハケメのみが残るもの(85・87)もあることも壺・甕と同じである。内面はハケ調整を行うもの(80~85・87・90・91・93)とヘラミガキによるもの(79・88)がある。これらのうち82・84のハケメは底部の中心付近から左回



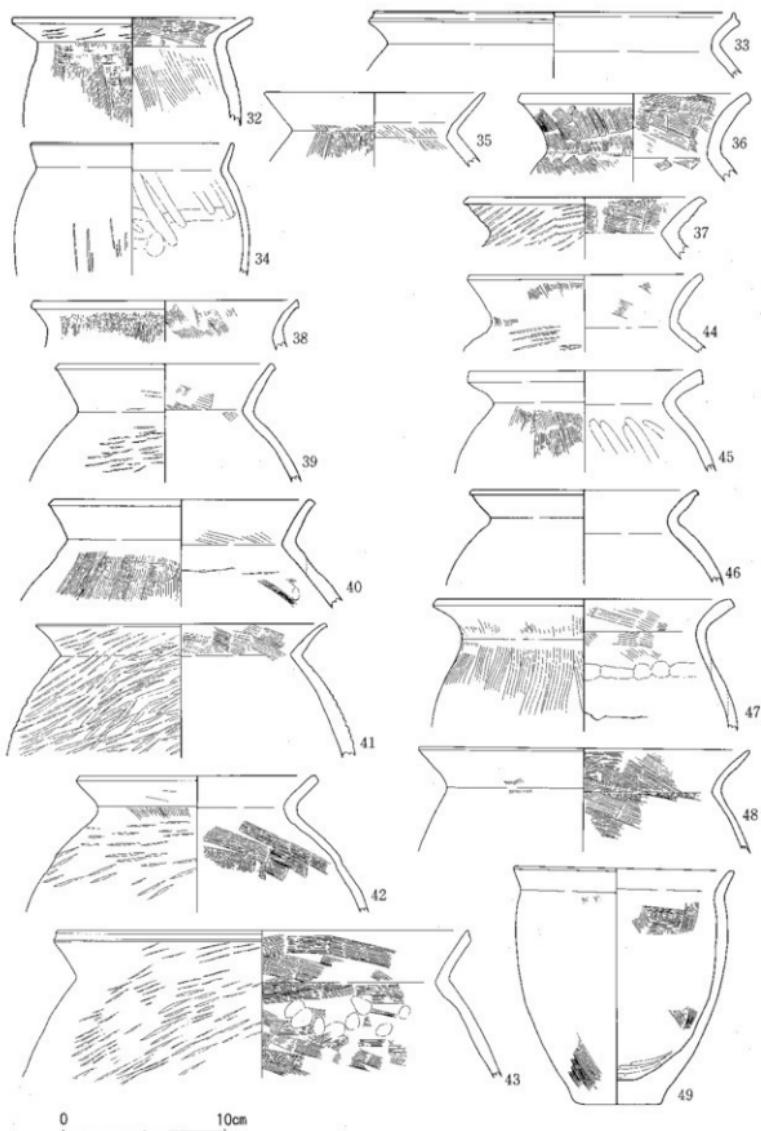
第5図 SR201 出土遺物（土器）－壺・甕①



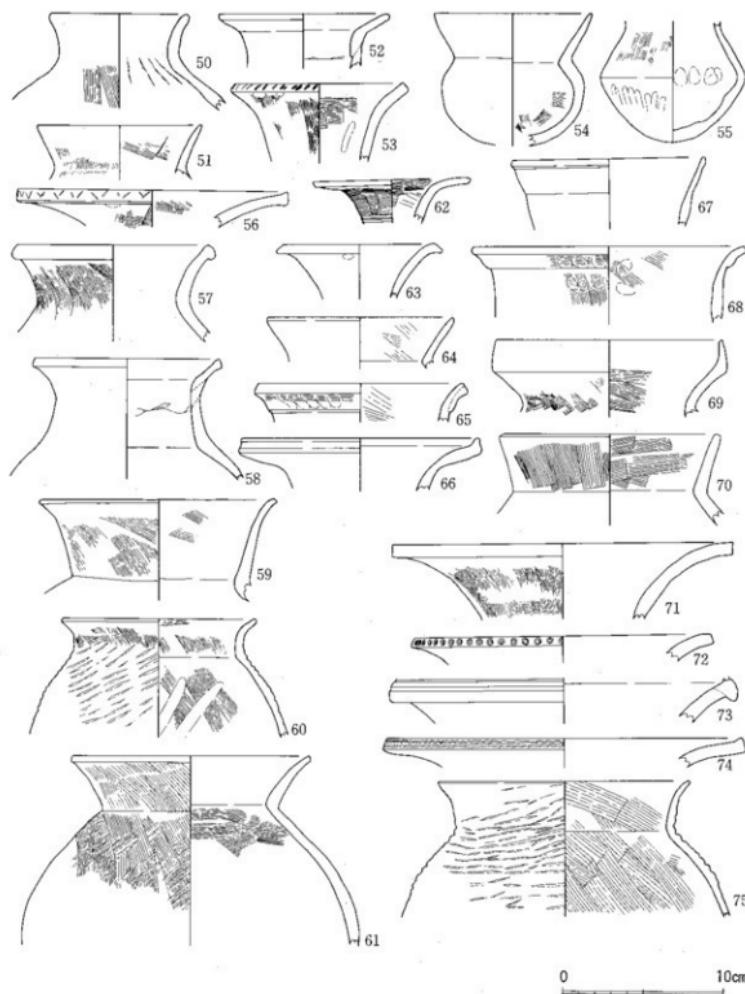
第6図 SR201 出土遺物（土器）—壺・壺②



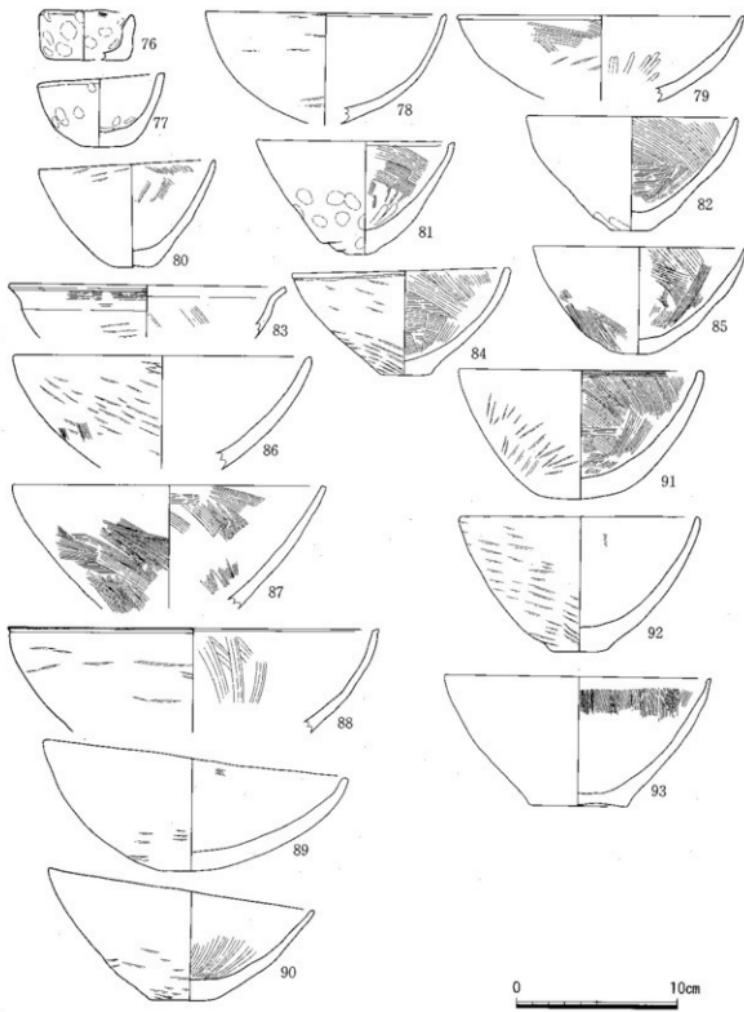
第7図 SR201出土遺物（土器）一覧①



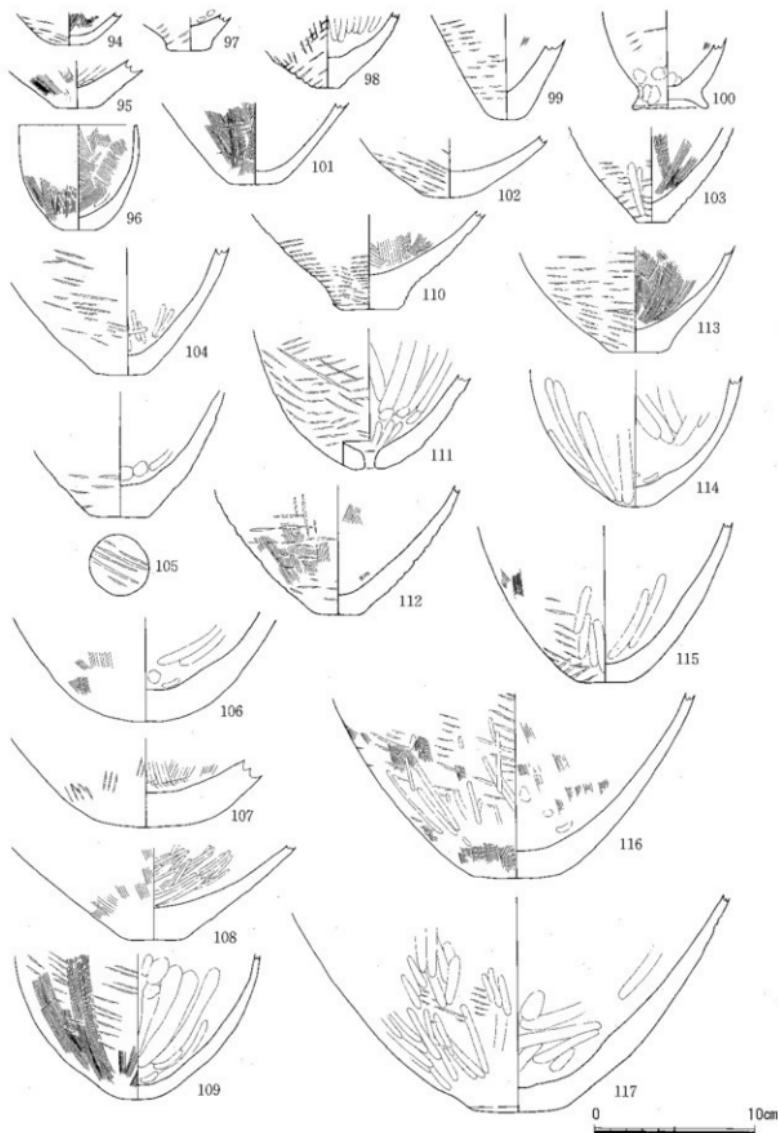
第8図 SR201出土遺物（土器）一賽②



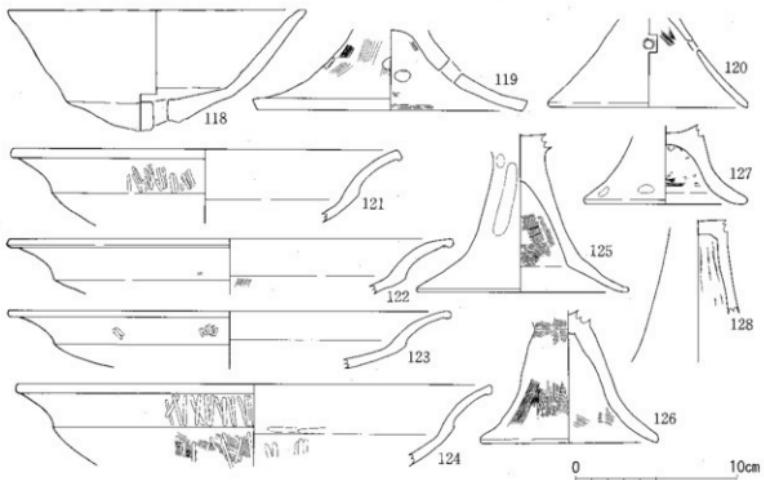
第9図 SR201出土遺物（土器）一壺



第10図 SR201出土遺物(土器)一鉢



第11図 SR201出土遺物（土器）－底部



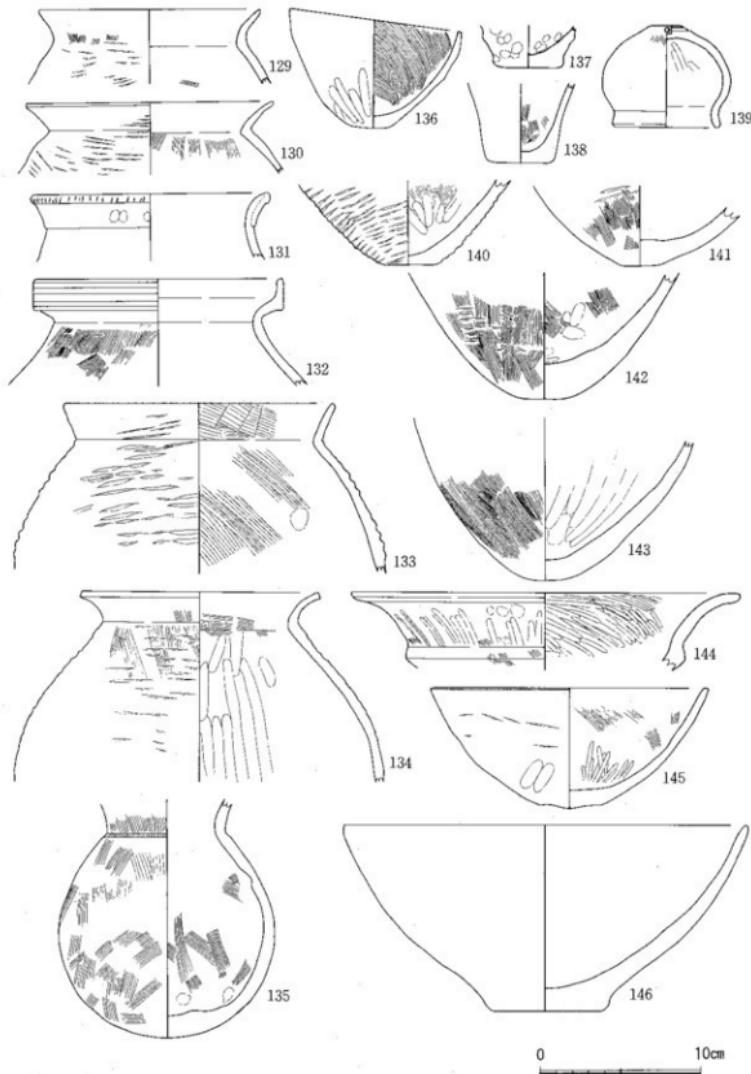
第12図 SR201出土遺物(土器)一高环

りに風車状に上げている。その他口縁端部付近を強く撫でるもの(79・88・93)も存在する。底部は丸底のもの(89~91), 丸底に底部をつけたようなもの(84・92), 平底のもの(82・93)があり, 89・90は口縁部が傾いている。

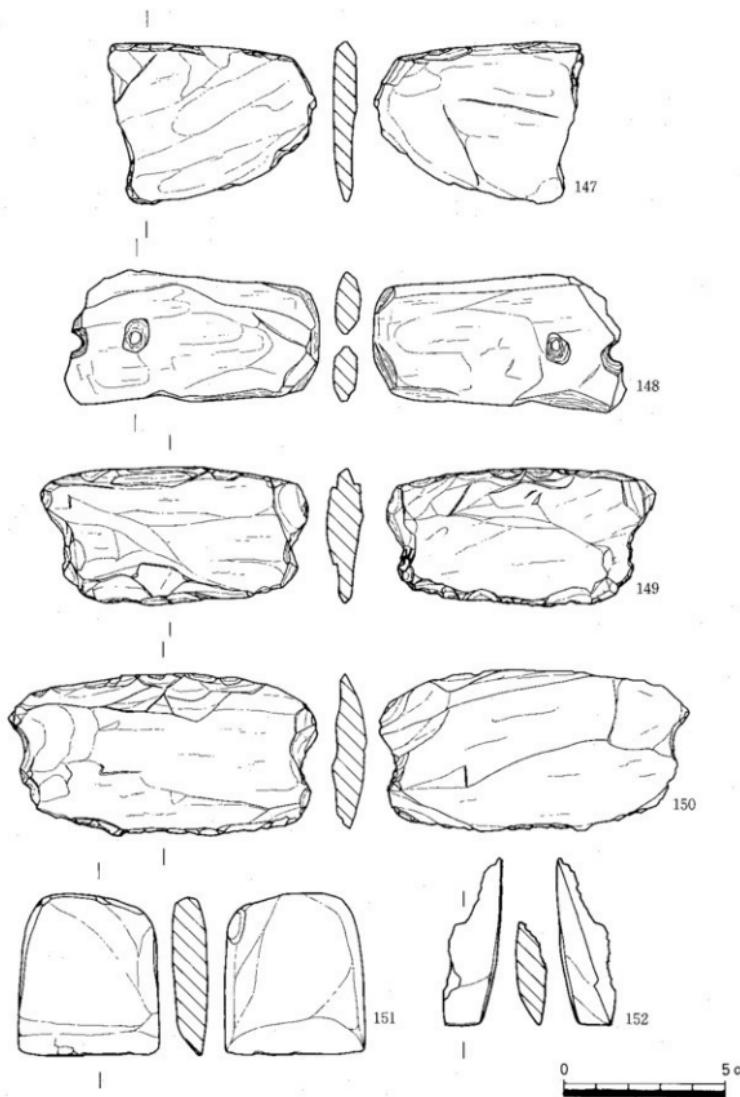
底部には壺(102・106・107), 壺(98・104・105・109・111・112・114~117), 鉢(94~97・108・110・113)があるほかは器種の判定をしかねるものである。これらの成形・調整についてはそれぞれの項目で述べたことに当てはまるものが多いが, 特筆すべきこともいくつかある。壺では105は底面にもタタキを施す。111は底部中央に穿孔し, 体部には横方向のタタキと斜め方向のタタキが混在している。また, 114・117のように外面をナデによって仕上げるものや, 115・116のように外面にタタキのあとナデとハケが混在するものもある。

高环の坏部は121~124のように大きく外反する口縁部をもつものと118のような直線的に広がるものがある。118は脚部を欠損し, 高环としての機能を失ったのち底部に穿孔され転用されている。内外面とも摩滅が著しく, 調整は不明である。124は外面の下半にハケを施したのち内外面ともをヘラミガキで仕上げている。121・123も外面にヘラミガキを施す。

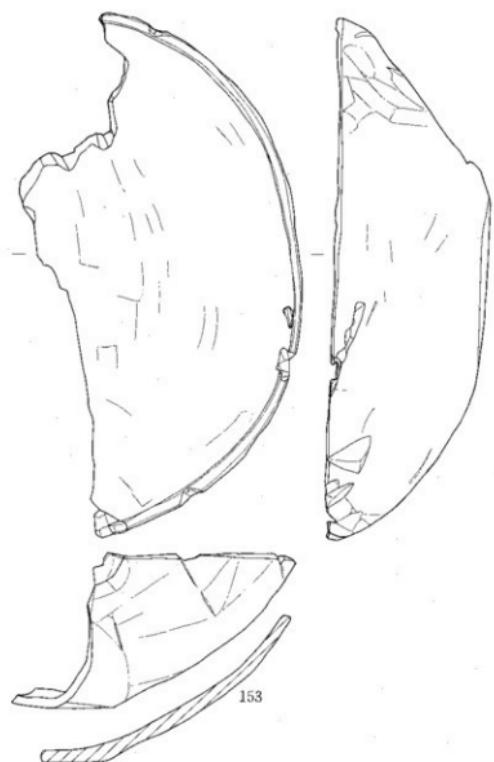
122の外面の調整は摩滅により不明であるが, 内面にハケメが残る。120は器台である。上方に穿孔が見られる。127は脚部であるが, 器高が低く台付壺や台付鉢といったものかもしれない。125・126・128は高环の脚である。125は外反しながら下方に広がる。外面ナデ内面ハケによる成形・調整を行う。126はやや膨らみながら下方に広がるものであり, 内外面ともにハケ調整を行う。128もやや外反しながら広がるもの, 125に比べると直線的な印象が強い。内面に絞り目が残る。119



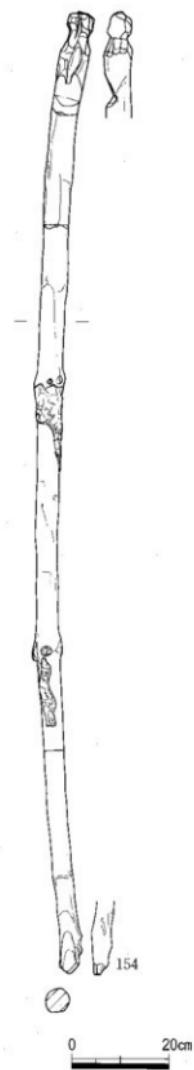
第13図 SR201出土遺物（土器）－V層



第14図 SR201, SD103出土遺物(石器)



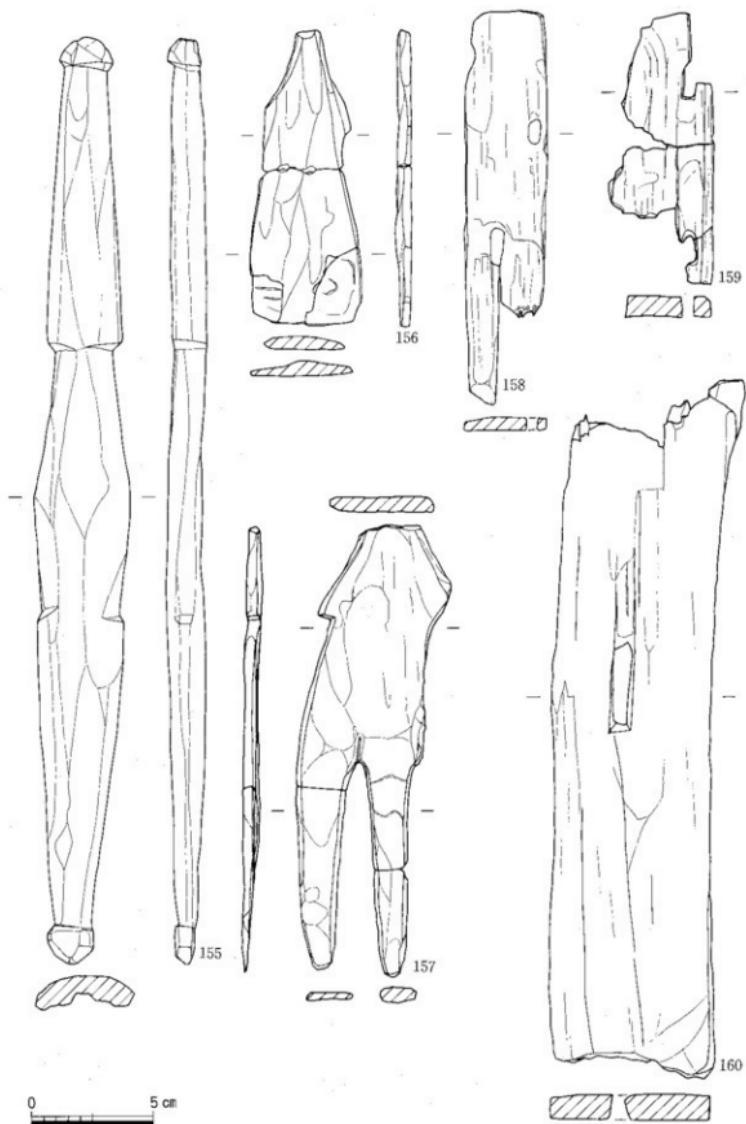
153



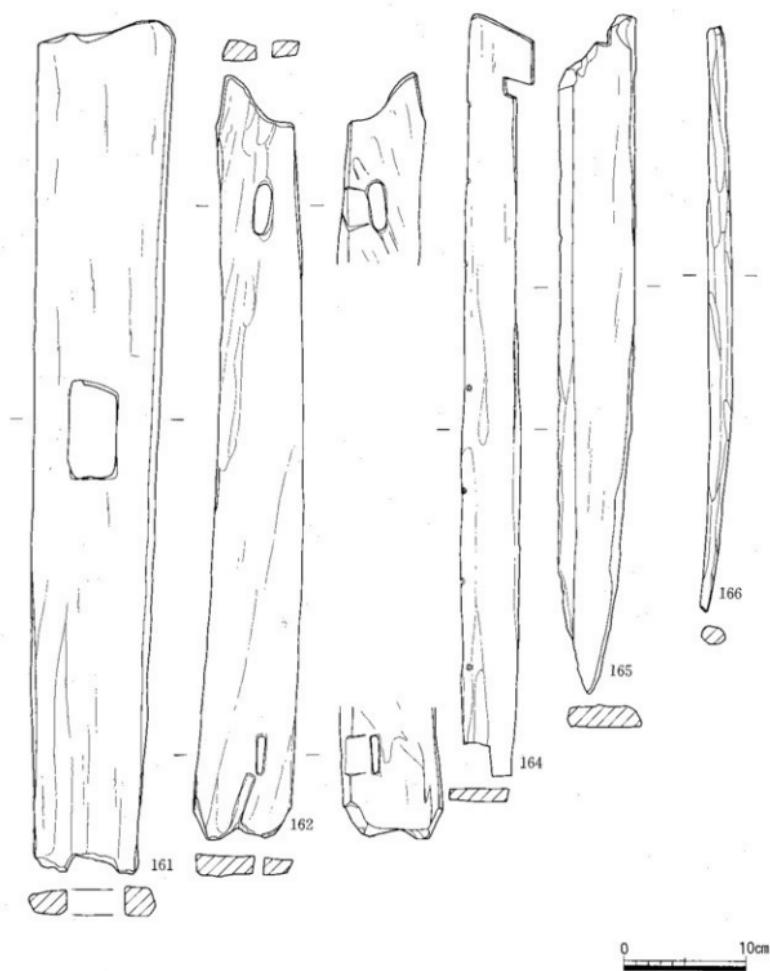
154



第15図 SR201出土遺物(木器) -①



第16図 SR201出土遺物(木器) -②



第17図 SR201出土遺物（木器）-③

は脚部である。内面の天井がかなり低いが坏部の欠損部が不明であるため、器種の限定は難しい。不規則に穿たれた4孔を有し、内外面とも小刻みなハケを施す。

第13図はV層中に混入したⅢ・Ⅳ層に含まれた遺物である。130・132・133・140は壺である。そのうち132は吉備系の壺と思われ、搬入品である。外面にハケメを有する。130・133は外面に横方向のタタキを施し、内面はハケによる調整を行う。140は底部であるが、やや斜め方向のタタキメを有する。内面にはハケ、指頭圧痕を施す。小さな平坦面をもつ平底である。

壺は129・131・134・135である。129・134は短頸の広口壺である。いずれも横方向のタタキメと口縁部にハケメを有する。134は体部の上方のみタタキのあとハケを施している。内面の調整は、129は摩滅のためわずかにハケメを観察するにすぎなかったが、134は口縁部にハケ、体部にナデによる調整がなされている。135は丸底壺である。内外面とも短いハケ調整を多く行う。131は弥生中期の混入品である。

136・145・146は鉢である。136は外面にナデ・内面に風車状のハケを施す。口縁部は傾いている。145は丸底であるが、底部の中心を巡るように撫でており、口縁部は傾いて安定する。外面はタタキのちナデを施し、内面は上半がハケ、下半をミガキで調整する。146は平底である。摩滅のため調整等は不明である。137・138・141～143は底部である。137は手握ね土器で外面に指頭圧痕が残る。138は器種不明であるが、コップのような形をなすものと思われる。141・142は壺であると思われる。141は内面の調整が摩滅により不明であるが、外面はタタキ後ハケを施す。142は141と同様に外面にタタキ後ハケ、内面はハケを施す。139は小型の壺のようなものであろう。底部に穿孔があるため吊して使用したものと考え、上下を反転して図示した。外面にハケ、内面にヘラミガキがわずかに残る。144は高坏である。大きく外反する口縁部をもち、外面の上半にヘラミガキ、下半にハケ、内面にヘラミガキを施す。

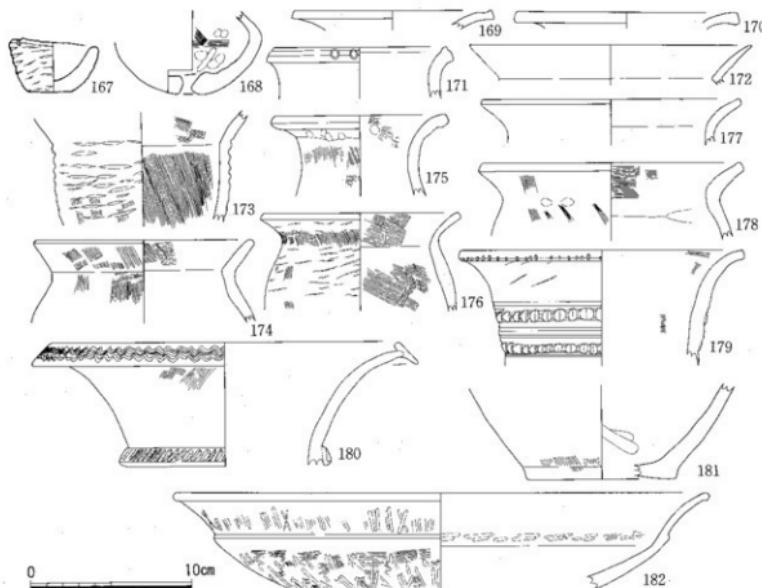
147～150は石包丁である。そのうち147・148は綠色片岩製の磨製品で、148は中央部に横に並んだ2孔を穿つ。149・150は頁岩製の打製品である。両者とも2ヶ所に挿入が認められる。また、150は未製品である。151は頁岩製の磨製扁平刀石斧である。刃部には使用による微細な欠損が見られる。

153は木製容器である。約1/2を欠損し、芯の有無は不明である。154は両端加工木である。丸木材を使用し、一部には樹皮が現存する。非常に長大で、長さは約2.1mをはかる。用途は不明である。155は紡績具・織機の一部であろう。丸木材を使用するが、現状では下半を欠損している。156は曲柄平鍼、157は曲柄又鍼で現存は2足であるが、本来は3足であったものと思われる。ともに板目材を使用している。158～164は有孔板材であるが、用途は不明である。何らかの部材であろう。163はそれぞれの孔の片側に何かを通していた痕跡があり、第33図の272のように木の皮などを通して固定していたのかもしれない。いずれも板目材である。165も部材であるが、孔は有しない。板目材である。166は丸木材を使用した加工木である。漁撈具の一部であるかもしれない。

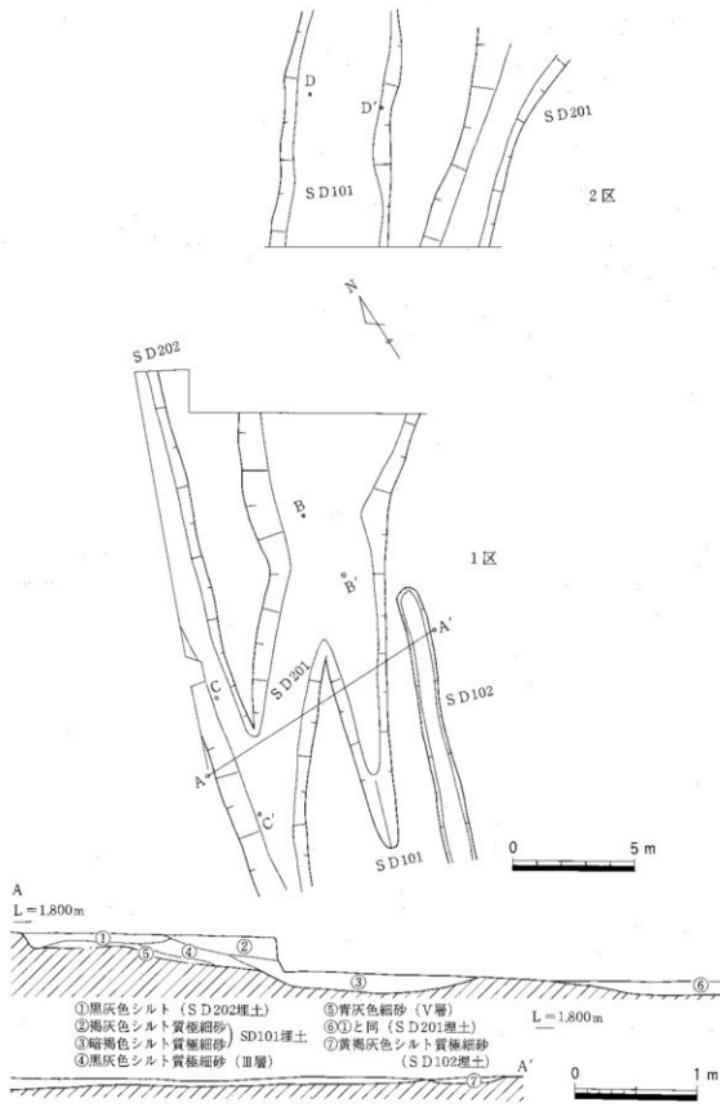
SD201 (第 18~20 図)

2 区西南端付近から西へ派生する溝状遺構で、1 区北東辺の中央付近で調査区外へと逃げる。自然遺構である可能性もあるが、溝状遺構として扱った。Ⅲ層を埋土に持つ。

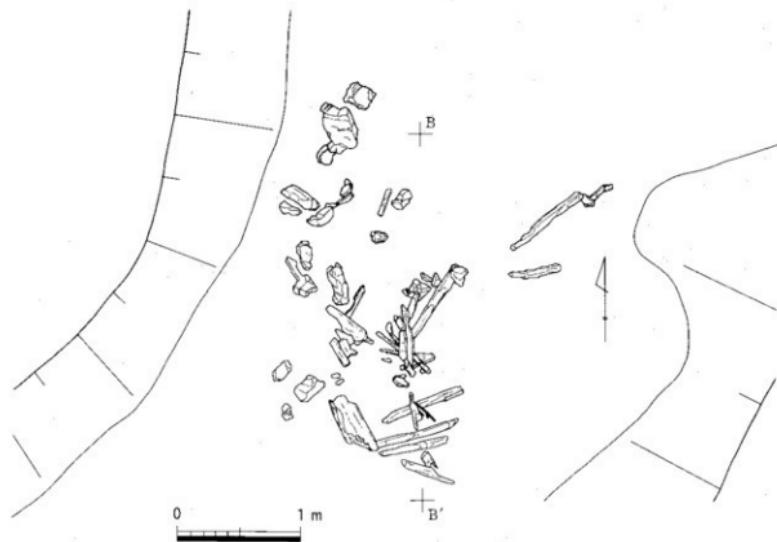
167 は小型の鉢である。外面にタタキを施し、内面を丁寧に撫でている。168 は底部である。外面は摩滅が著しいが、下方にハケメを確認できる。内面は指頭圧、ハケ、ナデを施し、底部に穿孔している。169・170 は壺である。171~174・176・178・179 は甕である。171 は弥生中期の甕であり、混入品である。口縁端部に竹管文 2 ケが現存する。172 は下川津 B 類式と呼ばれるもので讃岐地方からの搬入品である。口縁部のみの破片であるが内外面ともナデを施し端部に向かって鋭く伸びている。173 は外面に横方向のタタキメが見られ、下方はタタキののちにハケを施す。内面は体部がナデ、口縁部にはハケ残る。174 は体部の内面を撫であるが、口縁部の 1.5 センチほどの下方に稜をもつ。壺を意識したものかもしれない。176 はやや横方向のタタキメを持ち、口縁部はタタキののちにハケを施している。178 は体部に板材で左上方に搔き掲げ、文様のようにしている。179 は弥生



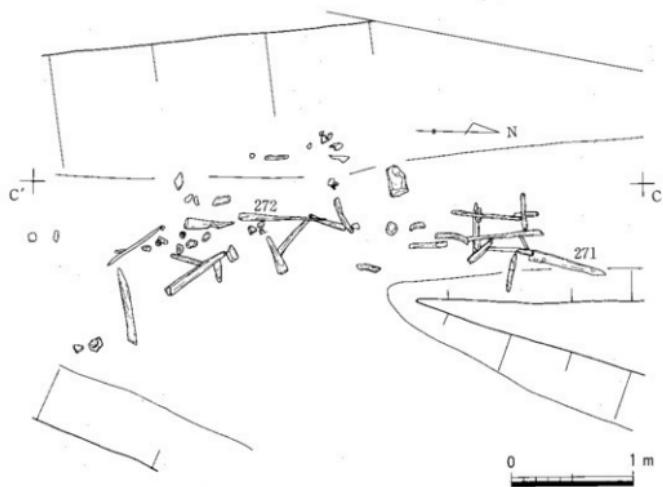
第 18 図 SD201 出土遺物



第19図 SD101, 102, 201 遺物出土状況・土層図測点



第20図 SD201 遺物出土状況



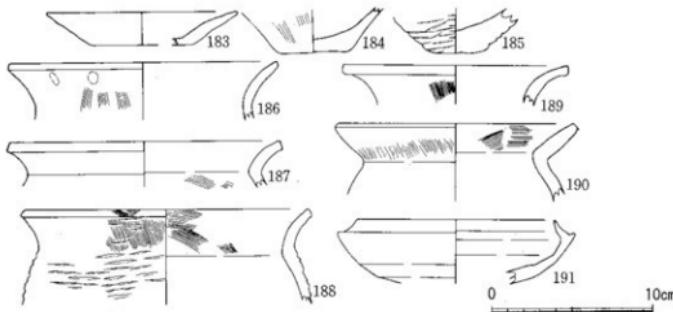
第21図 SD202 遺物出土状況

前期末の混入品である。口縁端部に刻目文、体部に押圧凸帯文とその上下にヘラ描沈線文で装飾している。175・177は壺である。貼付口縁をもち、外面は口縁部に指頭圧、頸部にハケを施す。内面にも指頭圧・ハケが見られる。弥生中期の混入品である。181は鉢である。内外面とも摩滅が著しいが下方において外面にハケ、内面にナゲが認められる。182は高坏である。坏部が現存するのみであり、直線的に広がる口縁部をもつ。外面の下半はハケ後ヘラミガキ、上半はヘラミガキを施している。内面は上半に調整が残るが、その下半がヘラミガキ、上半は撫でており丁寧に仕上げる。SD202(第20・22・34図)

1区東端にみられる浅い溝状遺構である。1区北東端から現れて南流し、SD201と合流する。北端部に近づくほど削平されており、北端部では深さ2~3センチ程度現存するのみである。一方、SD201付近では削平を受けているものの保存状態も良好で、自然木や木製品の出土もみられる。

183は土師器小皿であり混入品である。摩滅が著しいものの底部には回転糸切り痕が観察できる。184・185は底部である。両者とも摩滅が著しいが、184は外面にハケが、185は外面にタタキが見られる。186・189は壺である。口縁部外面にハケを施す。187・188・190は甕である。188は体部外面に横方向のタタキメが見られる。口縁部の調整は内外面ともハケである。191は5世紀後半の須恵器・坏身であり、混入品である。

271・272は板目材を用いた有孔板材である。何らかの部材ではある。272は孔に桜と見られる樹皮が通してあり、また、樹皮が当たっていたであろう箇所にはその痕跡が見られる。



第22図 SD202出土遺物(土器)

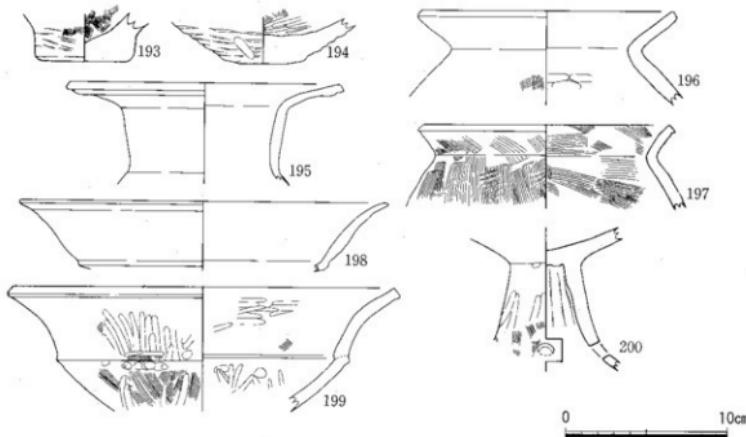
古墳時代前期の遺構と遺物

SX201 (第 23~25・27 図)

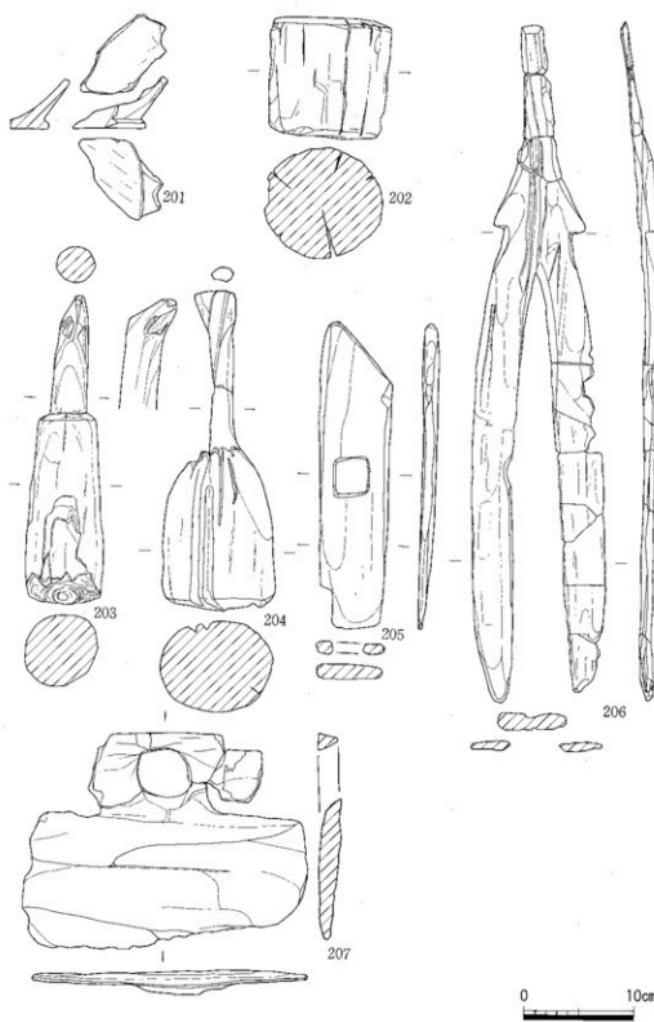
3 区西南端に存在する遺構であり、SR201 と SR202 に周開を囲まれている。明確なプランを持つわけではないが、枝を払った丸木や加工材を杭や人頭大の角礫で固定してあったり、また SX301 に伴うと見られる、SR201 から延び、この横で消滅する溝状遺構 (SD203) などから何らかの作業場であったと考えている。SR201 からこの SD303 に水を引いたのであろう。VI 層を床面とする。

193・194 は底部である。両者とも外間にタキ・内間にハケ調整を行う。ともに平底ではあるが、193 はしっかりした底部を作り、194 は丸底を凹ましたような底部である。195 は壺である。直線的に立ち上がる頸部から大きく広がる口縁部を作り出す。196・197 は甕である。197 は斜め方向のタキのあとハケを施す。198~200 は高坏・坏部である。198 はやや膨らみながら外反する口縁部をもつ。199 は大きく外反する口縁部をもち、外面の下半はハケ後ヘルミガキ、上半および内面にはヘルミガキを施す。

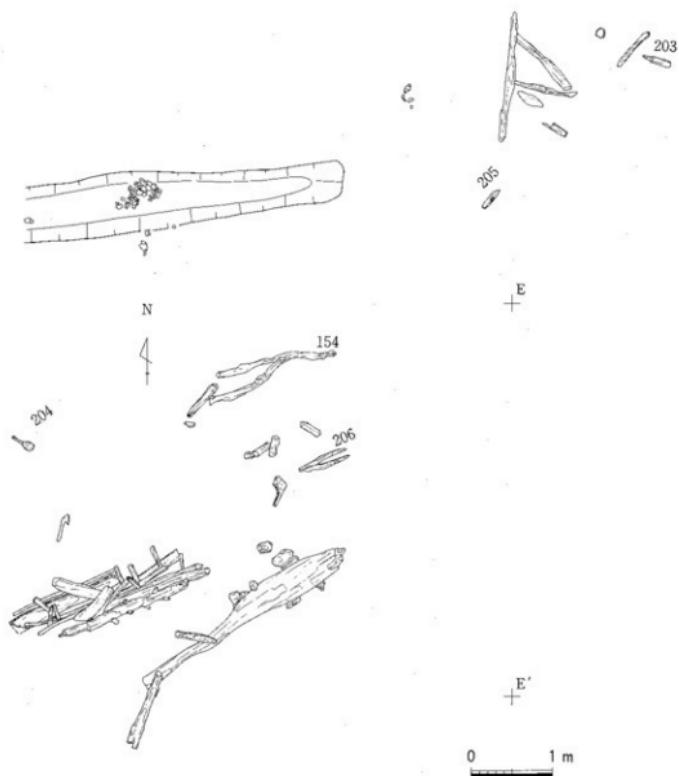
201 は木製容器・桷である。どっしりとした底部を作り出している。202~204 は横樋である。いずれも丸木材を使用している。204 は完存している。205 は有孔板材である。板目材を使用する。206 は曲柄又鍤である。柾目材を使用するが芯を欠損している。鍤先は 2 足に分かれれる。207 は直柄鍤先である。板目材を横に使用する。



第 23 図 SX201 出土遺物 (土器)



第24図 SX201出土遺物（木器）



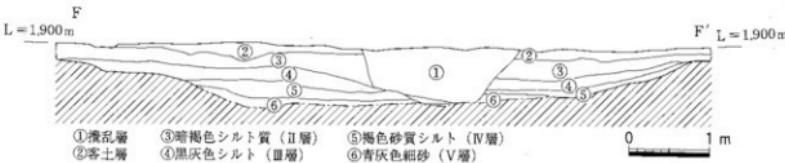
第25図 SX201 遺物出土状況

SR202 (第 26~28・34 図)

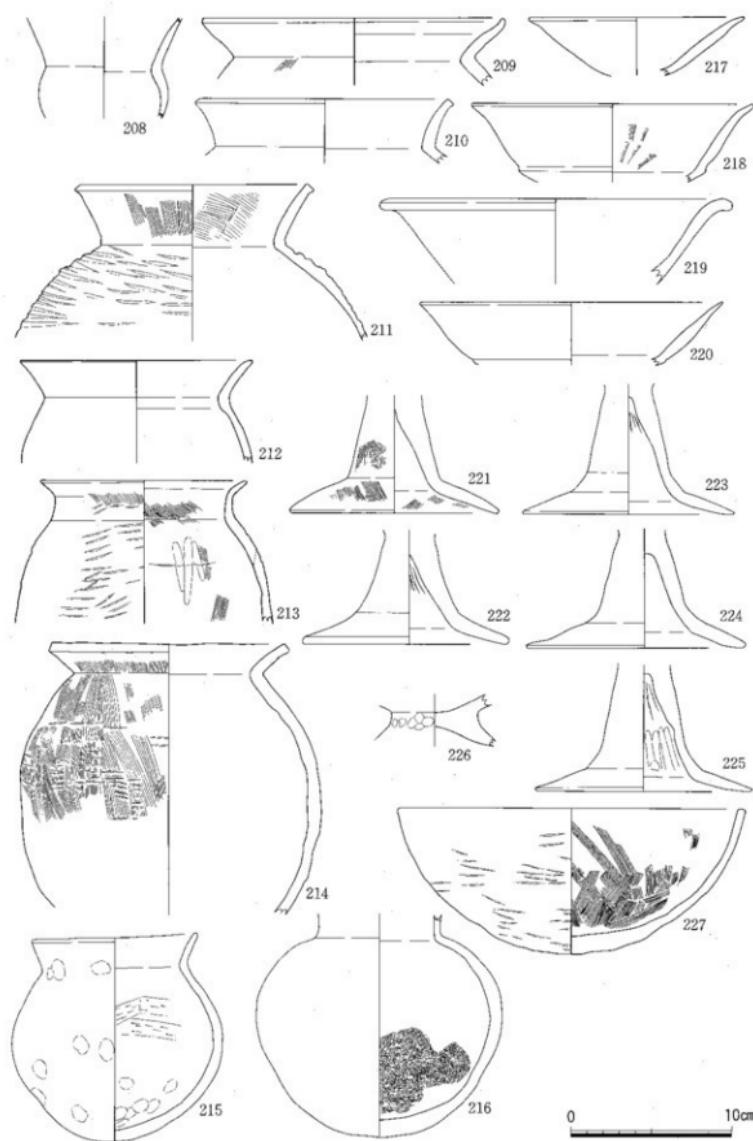
3 区東端から 3 区中央部にのび、そこから約 90 度向きを変え南流、2 区中央やや南よりで SR201 に合流し、あたかも SX301 を取り巻くように存在する。遺物の出土は網掛けした場所においてのみ確認され、他の場所においての出土はなかった。要所要所を攪乱に切られ、不明な箇所が多い。埋土にⅢ層およびⅣ層を持つ。

出土遺物は 3 区東端付近に集中し、炭化米の残る壺の存在や高坏が多いこと、完形の丸底壺の存在から付近における河川祭祀の可能性を考えたい。

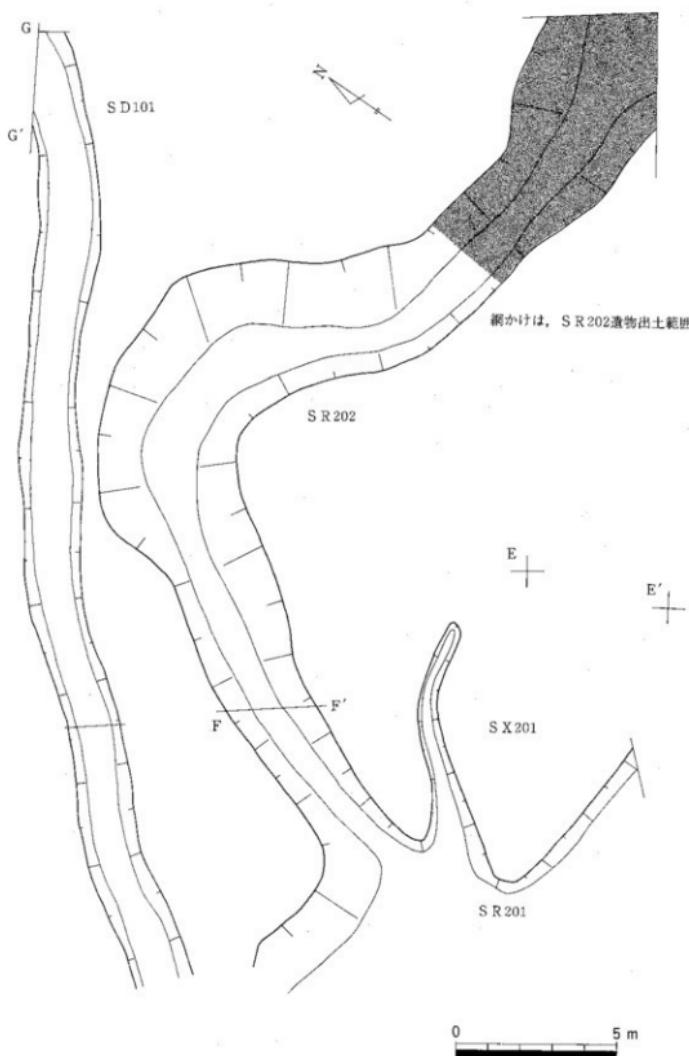
208 は小型丸底壺である。209~211 は甕である。209 は口縁部のない外面にヨコナデを施す。砂質の荒い胎土をもつ。搬入品の可能性がある。211 はやや横方向のタタキメを有し、口縁部は内外面ともハケ調整を行う。212・213 は壺である。両者ともごく短い頸部を有する広口壺である。213 はやや横方向のタタキ、口縁部の両面にハケ、体内部はナデを施す。214 は甕である。体部に横方向のタタキ後ハケ、口縁部の下半にハケ、口縁端部付近にハケを施す。215・216 は丸底壺である。このうち 215 は外面を指頭圧で成形したのち丁寧に撫でている。内面は上半にヘラケズリを行い、下半には指頭圧が残る。216 は内外面ともに調整は不明であるが、内面の底に炭化米が付着している。217~225 は高坏である。そのうち 217~220 が坏部、221~225 が脚部である。219 は混入品である。217・218・220 はいずれもやや内湾しながら外方に広がる口縁をもつ。調整は 218 が内面にハケ調整を行うほかは不明である。221 は直線的に下方へ広がり、裾部はやや内湾する。外面と内面の裾部にハケ調整を行い、端部付近はナデを施す。内面の天井部付近に絞り目が残る。222 はやや外反しながら下方に広がり、裾部は直線的である。外面はナデを施し、内面には絞り目が残る。223 はやや内湾気味に開き、裾部も内湾気味に広がる。内面、外面ともに摩滅のため調整は不明であるが、内面の天井部付近に絞り目が残る。224・225 は内湾気味に下方に広がり、裾部は直線的である。224・225 ともに外面にヨコナデを施し、224 は内面もヨコナデで絞り目もナデ消している。225 の内面は縦方向に強いナデを施す。226 は脚部である。脚部の付け根に指頭圧痕が残る。227 は鉢である。横方向のタタキをもち、内面にはハケを施す。1 は柾目材を用いた板材である。芯はもたないが、かなり薄く仕上げ、端部に段を作り出している。2 は板目材を用いた板材である。端部付近を「く」の字形に削ってある何かの製品の破損材であろうが、器種は不明である。3 は柾目板を用いた有孔板材である。縦方向の中心線に沿って直径 7~8 mm 程度の孔が現存で 7 つ穿たれており、田下駄の一部である可能性が高い。4 は角材である。



第 26 図 SR202 土層図



第27図 SR202出土遺物（土器）



第28図 SD101, SR202, SX201 平面図・土層図測点

中・近世の遺構と遺物

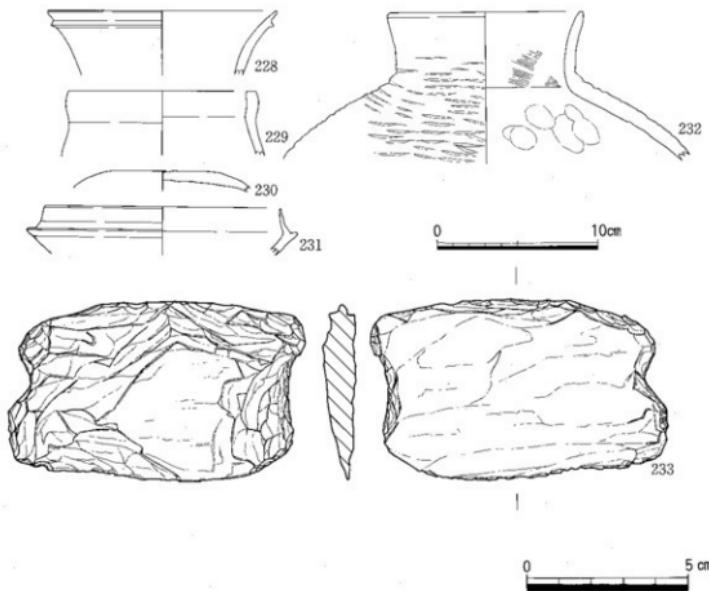
SD101 (第 29・30 図)

SD101 は 3 区東端から調査区北辺に沿って西流し、1 区の西端付近で消滅する遺構であるが、自然の流路である可能性もある。ごく浅い溝であり、上層は削平されているものと思われる。

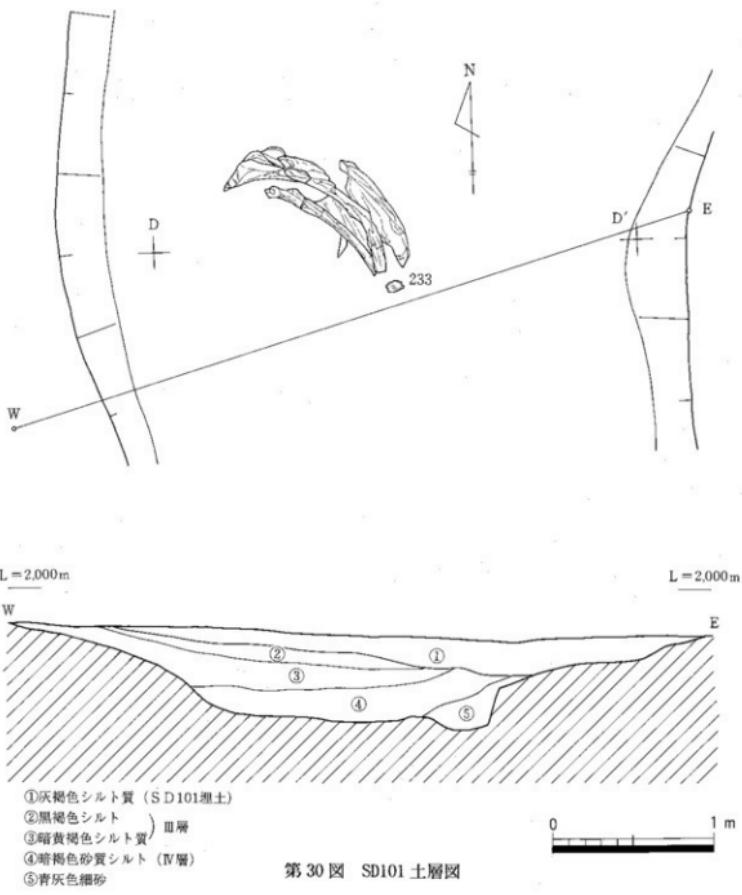
遺物の出土量が少なく、時期を特定するには至らないが、II 層を埋土とするため、時代幅はあるがこの時期の範疇で考えたい。

ところで、SD101 の下層に III・IV 層が所々は入り込み、同期の遺物がみられることから弥生時代終末期頃にここに小流路が存在した可能性が高い。

228, 229 は口縁部である。228 は口縁下部に凸帯を巡らす。両者とも回転ナデによって仕上げる。230 は須恵器・壺蓋である。231 は 5 世紀後半頃の須恵器・壺身である。232 は広口壺である。体部および口縁下部に横方向のタタキを施す。内面は口縁下部をハケで仕上げ、体部には指頭圧痕が残る。234 は頁岩製の打製石包丁である。背潰しを行い、両端には抉入が認められる。両面とも使用による摩滅が見られる。230~234 は混入品である。



第 29 図 SD101 出土遺物



第30図 SD101 土層図

SD102 (第14図)

2区の北東端付近に現れ、2区中央部付近でSD101と重なるとみられるものがSD202であるが、上層が削平されていること、両者ともⅡ層を埋土を持つことから切り合い関係の有無は不明である。また、主軸方向からSD104がSD202につながる可能性もあるが、1区の東端は全体的に低くなっている。土層断面においてもSD101との切り合いは認められず、不明といわざるを得ない。

SD202からの遺物の出土はみられなかったが、SD103からは頁岩製の磨製扁平片場石斧(112)が出士しているが、混入品である可能性が高い。

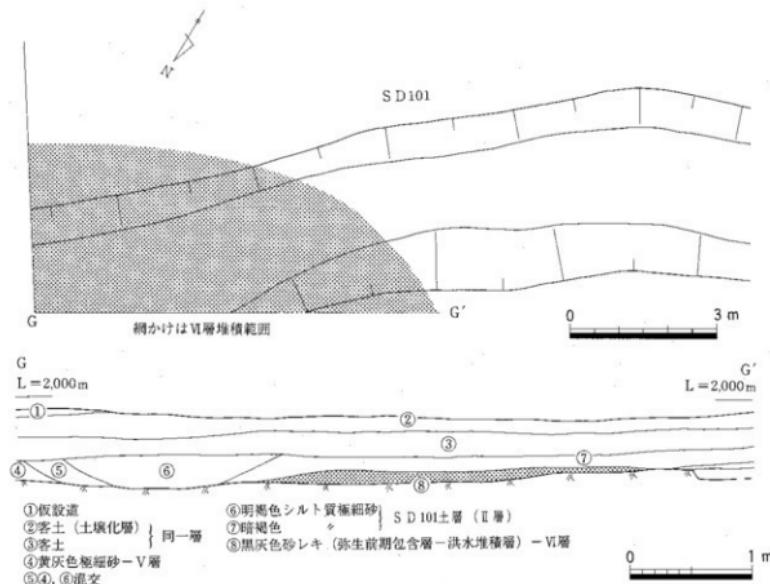
包含層の遺物

VI層の遺物（第28・31・32図）

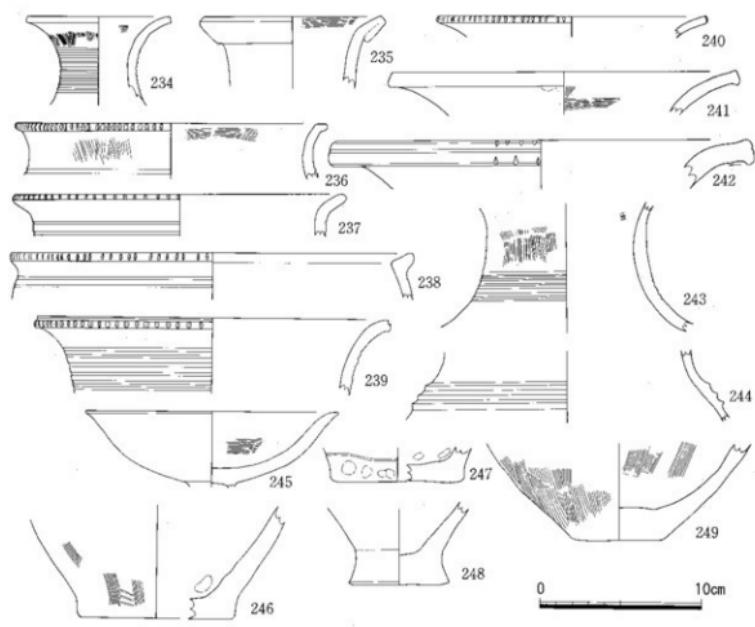
3区東北端のSD101下層においてのみ弥生時代前期末の遺物を多く含むが礫層（VI層）がみられる。弥生時代前期の遺物を含む包含層はここでのみ確認できるものである。VI層は洪水堆積層であり、本来広く堆積していたものが、後世に削平されたものであると考える。

234は長頸壺である。大きく外反しながら開く頸部をもちそこに8条のヘラ描沈線が巡る。口縁端部付近を内外面ともナデ、口縁下部にハケを施す。235は弥生中期の壺である。貼付口縁をもち、口縁部内面にはハケメが残る。236・238は壺である。いずれも口縁端部に刻目文、頸部にヘラ描沈線をもつ。

237・239～244は壺である。237・239は口縁端部に刻目文をもち、頸部にヘラ描沈線を巡らす。240は口縁端部に刻目文を有する。241は外面にハケを施し、その後口縁端部周辺を撫でている。242は口縁端部に上方・下方のそれぞれから刻んで装飾する。243・244は頸部である。243は現存6条のヘラ描沈線を巡らせ、外面をハケで調整している。244は凸帯3条をつまみ出している。245は高坏・坏部である。内面にハケメが残る。246～249は底部である。246はしっかりとした底部をもち、外面はタタキの後ハケを施し、内面には指頭圧痕が残る。247は指頭圧で成形し、沈線を現存で1条巡らせる。248は台形の脚部をもつ。249は内外面ともハケ調整を行う。



第31図 VI層分布範囲・堆積状況

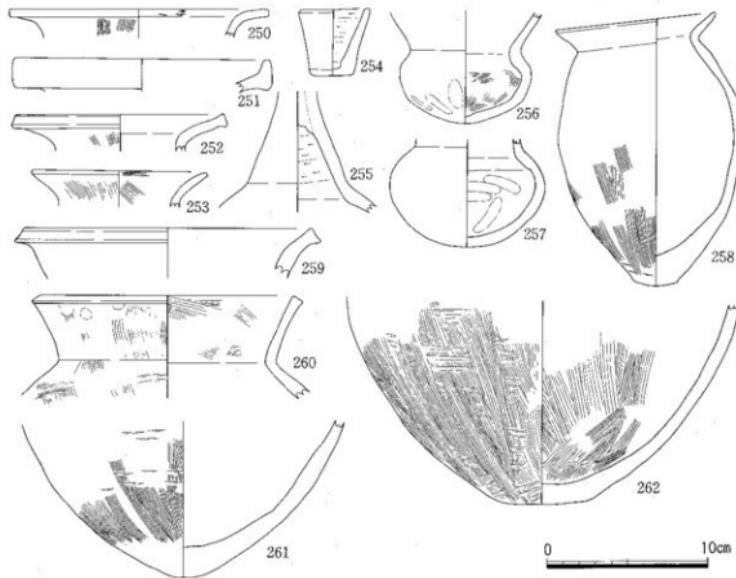


第32図 VI層出土遺物

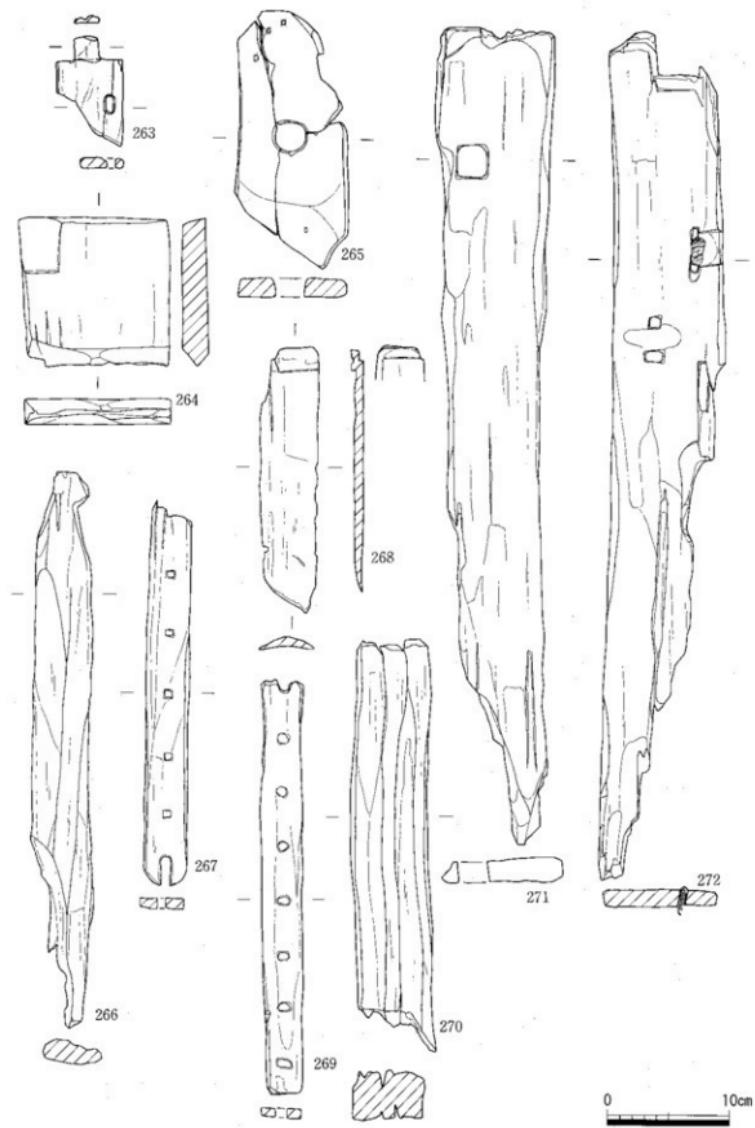
III層の遺物（第33・34図）

III層は弥生時代終末から古墳時代初頭頃の土器に加え、須恵器等を含む包含層である。基本層序の項でも述べたが、前年度調査のIX層である可能性が高い。

251～253は壺である。252は摩滅のため調整は不明であるが、それ以外はいずれもハケ調整を行っている。254は内面ヘラケズリを行う小型の鉢である。255は高杯に脚部である。内湾気味に広がり、裾部は直線的である。外面の調整は摩滅のため不明、内面はナデを施す。256・257は小型丸底壺である。256は外面ナデで形成し、内面はハケ調整を行う。257の外面は摩滅のため不明であるが、内面は撫でている。口縁部を欠損するが、破損のしかたから、欠損後も使用されていた可能性がある。258～260は甕である。258は摩滅が著しいが、外面下方にハケメを確認できる。口縁部を欠損している。259は摩滅により調整は不明であるが、口縁端部に退化凹線が見られる。260は体部にタタキのあとハケ、口縁部の外面にはハケを施す。261・262は底部である。両者とも外面はタタキのあとハケを施す。262は内面にもハケメを観察できる。263は板目板材である。凸部を作り出し、孔を穿つ。265は板目板の有孔板である。264は板目板材である。先端を削り尖らしている。263～265はいずれも用途は不明である。267は269と同様、田下駄の一部かもしれない。縦の中心線上に6～7mm程度の方形の孔を現存で5つ穿ち、端部には「U」字形の切り込みを入れる。



第33図 III層出土遺物（土器）

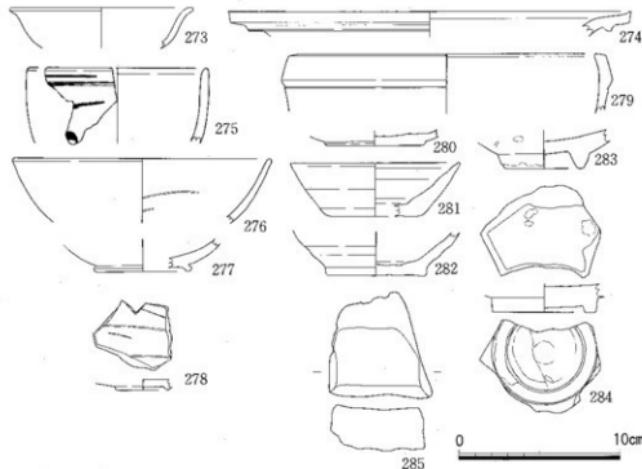


第34図 III層, SR202, SD202出土遺物(木器)

II層の遺物（第35図）

II層は中から近世にかけての包含層である。前年度のIV層中に瓦器碗の出土が見られることからこの層が今年度のII層に当たると思われる。しかし、前年度のIV層は古代の遺物が見られるのみである。

273は17世紀頃の肥前系磁器である。外反しながら広がる口縁をもつ。274は須恵器・壺の口縁である。5世紀後半頃の所産であり、III層からの混入である。275は肥前焼き染付・壺である。下方の染付文様は唐草模様であると思われる。276・278は瓦器碗である。276は内面に暗文を描く。278は底部である。278は底部のみの破片であるが、見込みにヘラミガキが残る。13世紀後半～14世紀初頭頃のものであろう。いずれも和泉型であり搬入品である。277は土師器・碗の底部である。体部や、高台の形態から12世紀前半頃のものであろう。279は14世紀頃の瓦質土器・釜もしくは火舍である。口縁下部に小さな鈸をもち、内外面および口縁端部に摩滅が著しいが回転ナデを観察することができる。280～282は土師器・壺である。280は形骸化した円盤状高台をもつ。いずれも摩滅が著しいが、底部に回転糸切りを行う11世紀初頭頃の時期を与えられよう。283は陶器の底部である。外面に釉がかかり、内面には重ね焼きの痕跡が残る。2次焼成を受けた可能性があり、赤色を呈する。断面逆台形の高台を削り出している。唐津焼きの可能性がある。唐津焼きならば18世紀頃の所産である。284は唐津焼き・底部である。断面逆台形の高台を削り出す。内面には砂目積みの痕跡が残る。285は布目瓦である。内面に指頭圧と布目が、外面には布目が残る。



第35図 II層出土遺物

第2節 4区の調査（第36・37図）

1・2区の西側部分は、7年度の試掘時には未調査であったため、念のために今回の調査に平行して確認を行った。それが4区である。その結果、若干の遺構及び遺物が確認できた。

調査区全体に数ヶ所の溝状の遺構や土坑状の窪みが見られたものの、いずれも自然のものである可能性が高い。唯一、人工のものと考えられるのは調査区南端付近で検出された配石である。遺物を伴っていないために時期の決定は難しいが、比較的浅い位置で検出されたことや、付近の包含層からの出土遺物に古代以降のものが一定量含まれていることから、比較的新しい時期のものである可能性も否定できない。配石は上面のレベルをほぼ揃えて配置され、面取りの加工をしてある。配石の間には杭が4本残存していた。東西幅約80cm、南北幅約1mを測る。その配置から、何らかの水利施設の一端と考えられる。

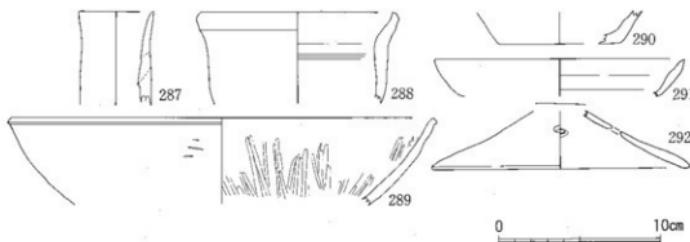
遺物は何れも遺構からの出土ではなく、表面はかなり摩耗している。

弥生時代終末期～古墳時代初頭

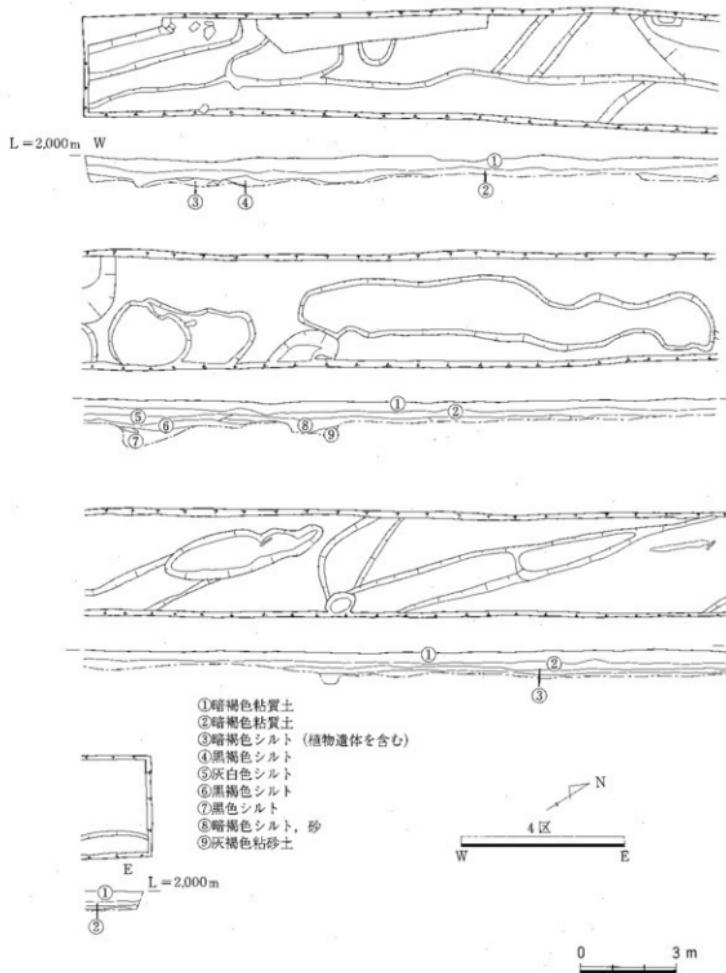
287の長頸壺、289の鉢である。289は内面にヘラミガキが比較的明瞭に残っている。

古代以降

291は土師器の皿で調整は不明である。288は瓦質土器で、やや口径は小さいものの鍋と思われる。乙字状の断面で口縁端部を内側に若干つまみ出している。内面はハケ状の器具で横方向に調整、外面の口縁部にも同様の調整が残る。290は土師質の壺で、成形には回転台を使用、調整は不明である。



第36図 4区出土遺物



第37図 4区平面・土層図

遺 物 觀 察 表

遺物観察表

SR201出土遺物

(土器)

調査区	時期	器種	現存部位・現存率	径	器高
1 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁部のみ欠損	11.2	28.8
2 2区	古墳前期	壺	頸部 1/2	12.2	10.0
3 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部 1/2	13.2	16.5
4 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部 1/2		
5 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	ほぼ完形	13.3	21.6
6 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	頸～体部 1/4		18.1
7 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	ほぼ完形	10.4	22.3
8 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～底部 1/2	15.4	24.5
9 2区	弥生終末～古墳初頭	底部	体～底部 1/2		
10 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部 1/8	15.6	4.4
12 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁部 1/6	14.0	4.8
13 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁部 1/8	15.2	2.9
14 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁部 1/4	5.8	2.5
15 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部 1/4	9.8	8.5
16 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部 1/4	11.8	6.7
17 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部 1/4	11.8	6.8
18 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁部 1/6	14.8	5.6
19 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁部 1/6	17.0	4.3
20 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部 1/3	18.4	8.3
22 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部 1/4	14.8	9.5
23 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部 1/3	13.8	8.3
24 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁部 1/6	19.2	4.2
25 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁部 1/8	12.6	4.5
26 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁部 1/8	14.8	2.7
27 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部 3/4	15.4	10.5
28 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部 1/3	17.6	9.8
29 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁部 1/8	17.4	3.1
30 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁部 1/8	18.2	4.0
31 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部 1/4	15.4	8.6
31 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁部～体部 1/3	19.6	10.2
32 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部 1/6	15.0	6.8
33 2区	弥生中期末	壺	口縁部 1/10	22.2	4.0
34 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部 1/2	12.4	8.2
35 2区	古墳前期	壺	口縁部 1/4	13.8	4.6
36 2区	弥生終末	壺	口縁部 1/4	14.0	5.5
37 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁部 1/6	14.4	3.8
38 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁部 1/8	16.4	3.2
39 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部 1/5	12.2	7.4
40 2区	古墳前期	壺	口縁～体部 1/3	15.8	6.7
41 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部 1/2	17.8	8.4
42 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部 1/2	14.8	8.5
43 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部 1/4	25.4	9.1
44 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～頸部 1/3	14.4	4.8
45 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁部 1/8	15.8	3.0
46 2区	古墳初頭	壺	口縁～体部 1/3	14.3	6.0
47 2区	古墳前期	壺	口縁～体部 1/4	15.8	8.1
48 2区	古墳前期	壺	口縁～体部 1/4	20.6	6.4
49 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～底部 2/3	16.8	14.6
50 2区	古墳前期	壺	口縁～体部 1/5	8.4	6.1
51 2区		壺	口縁部 1/4	10.2	3.0
52 2区		壺	口縁～頸部	10.8	3.9
53 2区	弥生中期	壺	口縁部 1/4	10.4	

成形・文様・調整(外面/内面)	色調(外面/内面)	備考	図番
ナデ・タタキのちハケ/ハケ・ナデ・指頭圧	黄白色/黄色		1
ハケ/ハケ	灰褐色/黄灰色		2
タタキ後ハケ/ハケ	黄灰色/黒灰色		3
タタキ・ハケ/ハケ	黄灰褐色/灰褐色		4
タタキ/ハケ	黒色/褐灰色		5
タタキ後ハケ/ハケ・指頭圧	赤橙色/明褐色	内面につなぎ目	6
タタキ/ハケ	明赤橙色/灰褐色		7
タタキ/ハケ	明赤橙色/灰褐色		8
タタキのちハケ/ハケ	灰白色/黒灰色		9
指頭圧/指頭圧・ハケ	褐色/黄灰褐色		10
ハケ・タタキ/ハケ・ナデ	黒色/灰褐色		12
不明/ハケ	灰白色/明黃褐色		13
タタキ/ハケ	灰褐色/明褐色		14
ハケ・タタキ/ハケ	明黃灰褐色/灰黄色	内面につなぎ目が顯著に残る	15
ハケ・タタキ/ハケ・ハケ後ナデ	黄灰色/明黃褐色		16
タタキ後ナデ/ハケ・ナデ	黒色/灰褐色		17
ハケ・タタキ/ハケ	灰褐色/黄灰褐色		18
ハケ/ハケ	黄灰色/黄灰色		19
タタキ/ハケ・指頭圧	灰黄色/黄灰色		20
タタキ/ハケ・ナデ	黒色/黄褐色		22
タタキ後ナデ/ハケ	黒色/黄灰色		23
タタキ後ハケ・タタキ/ハケ	黒色/黄橙色		24
タタキ/ハケ	黒色/明褐色		25
ハケ/ハケ	灰褐色/橙色		26
タタキ/ハケ	灰褐色/灰褐色		27
タタキ・ナデ/ハケ・ナデ	褐色/明黃褐色		28
タタキのちハケ/ハケ	黄灰白色/褐灰色		29
ハケ・タタキ/ハケ	黒色/明褐色		30
タタキ後ナデ・タタキ/ハケ	黄灰色/暗褐色		31
タタキ後ハケ/ハケ	黒色/褐色		31
タタキ後ハケ/ハケ	黒色/黄灰色		32
不明/不明	黒色/黄褐色		33
タタキ/ナデ・指頭圧	黄灰白色/明褐色		34
ハケ/ハケ	黒色/灰褐色		35
ナデ・ハケ/ハケ	明黃橙色/黄灰褐色		36
タタキ/ハケ	黒色/明黃褐色		37
ハケ/ハケ	黄灰色/灰褐色		38
タタキ後ナデ・タタキ/ハケ	黒色/暗黃褐色		39
ナデ・ハケ/ナデ・ハケ	黒色/灰褐色	内面につなぎ目が残る	40
タタキ/ハケ	黄灰色/黄褐色		41
ナデ・ハケ・タタキ/ハケ・ナデ	明黃褐色/灰褐色		42
タタキ・ナデ/ハケ・指頭圧	明赤褐色/暗黃褐色		43
ハケ・タタキ/ハケ	赤橙色/赤橙色		44
タタキ/ハケ	黒色/明褐色		45
ナデ/ナデ	灰褐色/灰褐色		46
ナデ・ハケ/ハケ・ナデ	褐色/黄灰褐色	つなぎ目をナデ消す	47
ハケ/ハケ	黒色/灰褐色	外面に吹きこぼれ?	48
ハケ/ハケ・ナデ	灰白色/明褐色		49
ハケ/	赤橙白色/黄灰白色		50
ハケ/ハケ	黄灰色/黄灰色		51
不明/不明	赤橙白色/明灰褐色	内面につなぎ目が顯著に残る	52
刻目文・指頭圧・ハケ/ハケ・ナデ	明赤橙色/黄白色		53

図番	調査区	時期	器種	現存部位・現存率	径	器高
54	2区	古墳前期	小型丸底壺	口縁～底部 1/2	9.8	8.3
55	2区	古墳前期	小型丸底壺	頸部～底部 1/2	—	7.5
56	2区	弥生中期	壺	口縁部 1/8	17.2	2.3
57	2区	古墳初頭	壺	—	11.8	5.9
58	2区	—	壺	口縁～体部 1/3	11.4	7.3
59	2区	古墳前期	壺	口縁～頸部ほぼ完存	14.7	6.3
60	2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部 1/4	16.2	7.3
61	2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部 1/2	14.8	11.7
62	2区	—	壺	口縁部 1/6	9.8	2.7
64	2区	弥生後期	壺(壺?)	口縁部 1/8	14.8	2.0
65	2区	弥生中期	壺	口縁部 1/6	12.6	2.4
66	2区	弥生中期末	壺	口縁部 1/6	14.8	3.5
67	2区	古墳前期	壺	口縁部 1/4	11.8	4.3
68	2区	弥生中期?	壺	口縁～頸部 1/10	8.3	4.8
69	2区	弥生後期末	壺	口縁～頸部 1/2	13.8	4.7
70	2区	古墳前期	壺	口縁～頸部	13.8	5.7
71	2区	古墳初頭	壺	口縁部 1/6	21.0	4.7
72	2区	弥生中期	壺	口縁部 1/2	18.4	1.7
73	2区	弥生中期	壺	口縁部 1/5	21.6	2.7
74	2区	弥生中期	壺	口縁部 1/6	22.6	1.8
75	2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部 1/4	15.4	8.3
76	2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～頸部 1/4	13.6	4.5
77	2区	古墳初頭	手捏ね	完形品	7.9	4.6
78	2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	口縁～底部 1/2	14.8	6.8
79	2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	口縁～体部 1/8	17.8	5.3
81	2区	古墳前期	鉢	口縁～底部 4/5	11.0	6.9
82	2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	口縁～底部 1/2	2.4	7.0
84	2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	口縁～底部 1/2	13.6	6.7
85	2区	古墳前期	鉢	口縁～底部 2/3	13.2	6.6
86	1区	弥生終末～古墳初頭	鉢	口縁～体部 1/4	18.4	7.1
87	2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	口縁～体部 1/8	19.4	7.5
88	2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	口縁～体部 1/4	23.0	6.4
89	2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	ほぼ完形	18.6	8.0
90	2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	ほぼ完形	16.6	8.1
91	2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	口縁～底部 3/4	15.2	8
92	2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	ほぼ完形	3.4	8.4
93	2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	口縁～底部 2/3	16.6	8.0
94	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存	2.6	2.0
95	2区	—	底部	底部ほぼ完存	2.8	3.0
96	2区	古墳前期	無頸壺	口縁～底部 1/2	7.4	6.5
97	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存	2.7	2.3
98	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部ほぼ完存	2.4	6.1
99	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部ほぼ完存	—	6.6
100	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存	4.7	6.1
101	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部 3/4	3.2	5.2
102	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部ほぼ完存	2.0	3.7
103	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部 1/2	1.8	5.8
104	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存	3.6	6.9
105	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存	3.9	7.8
106	2区	古墳前期	底部	底部のみ完存	6.5	2.0
107	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存	—	5.5
108	2区	古墳前期	底部	底部のみ完存	4.0	5.7
109	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存	2.0	9.8
110	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存	3.6	6.1
111	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存	—	8.7
112	2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存	2.8	7.9

成形・文様・調整(外面/内面)	色調(外面/内面)	備考	図番
ナデ/ハケ・ナデ	灰褐色/灰褐色		54
ハケ・ナデ/指頭圧	灰褐色/灰黄色		55
綾杉文・ハケ・指頭圧・ナデ/ハケ	灰褐色/灰褐色		56
ハケ/不明	暗褐色/橙白色		57
不明/不明	黄橙色/暗黃灰色	内面に接合痕が顕著に見られる	58
ナデ・ハケ/ハケ	黄白色/明黃褐色		59
タタキ後ハケ・タタキ/ハケ・ナデ	明赤褐色/灰褐色		60
タタキ後ハケ/ハケ	明灰褐色/明黃灰色		61
ハケ・櫛書き沈線/ハケ	黄灰色/黄灰色		62
不明/不明	明灰色/暗黃灰色		64
指頭圧・ハケ/ハケ	黒色/黄灰褐色	貼付口縁	65
退化凹線(ナデ)	明赤褐色/明赤褐色		66
(ナデ/ナデ)	明黃褐色/明黃褐色		67
ナデ・指頭圧のちハケ/ナデ・ハケ	黒色/灰褐色		68
ハケ/ハケ	黄灰白色/黄灰褐色		69
ハケ/ハケ	黄灰色/灰褐色		70
ハケ/不明	黄灰色/黄灰色		71
竹管文/ハケ・ナデ	赤灰白色/橙色		72
沈線文・ナデ/ナデ	褐色/褐色		73
波状文・ナデ/ナデ	灰褐色/橙色		74
タタキ/ハケ	黑色/黄灰色		75
タタキ/不明	赤褐色/赤褐色		76
指頭圧・指頭圧	黄灰色/黄灰色		77
タタキ/不明	赤橙色/明赤橙色		78
ナデ・ハケ・タタキ/ヘルミガキ	黄灰褐色/明灰褐色		79
指頭圧/ハケ・ナデ	黄灰白色/灰黄色		81
ナデ/ハケ	黄灰色/灰黄色		82
成形・文様・調整(外面/内面)	黄灰褐色/明褐色		84
ハケ/ハケ	明灰色/黄灰色		85
タタキ後ハケ/不明	黄灰色/赤橙色		86
ナデ・ハケ/ハケ	赤橙色/黄灰色		87
ナデ・タタキ/ハケ	黄灰色/灰褐色		88
タタキ/ハケ	赤褐色/黄灰褐色		89
タタキ/ハケ	赤橙色/褐色		90
タタキ/ハケ	黄灰白色/褐色		91
タタキ/ハケ	明黄灰褐色/赤橙色		92
ナデ/ハケ	黄灰褐色/灰褐色		93
タタキ/ハケ	黄灰褐色/褐色		94
ハケ/指頭圧・ナデ	灰褐色/明黄灰褐色		95
ハケ/ハケ・ナデ	明赤灰色/黄灰色		96
タタキ・指頭圧・ナデ	赤褐色/黄灰色		97
タタキ/ハケ・ナデ	灰褐色/明黄赤褐色		98
タタキ/ハケ後ナデ	黄灰白色/灰白色		99
指頭圧・指頭圧	黄灰色/灰褐色		100
タタキ後ハケ/	暗褐色/褐色		101
タタキ/不明	灰褐色/明黃橙色		102
タタキ後ナデ/ハケ	赤灰褐色/黑灰色		103
タタキ/ナデ	黑色/明褐色		104
タタキ/ナデ	灰褐色/黑灰色	底部にタタキ	105
ハケ/ナデ	黄灰白色/赤灰白色		106
タタキ/ハケ・ナデ	黄白色/明橙白色		107
ハケ/ミガキ	赤色/明灰褐色		108
タタキのちハケ/ナデ	暗褐色/黄褐色		109
タタキ/ハケ・指頭圧	暗赤褐色/赤橙色		110
タタキ/ナデ・指頭圧	黄灰白色/黄褐白色	底部中央に穿孔	111
タタキ後ハケ/ハケ	暗褐色/黄灰褐色		112

図番調査区	時期	器種	現存部位・現存率	径	器高
113 2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	底部のみ完存	3.8	8.0
114 2区		甕	底部のみ完存		8.4
115 2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底盤のみ完存		9.8
116 2区	弥生終末～古墳初頭	甕	底部 1/2	5.4	11.2
117 2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底盤のみ完存		13.3
118 2区	弥生終末	高环	环部のみ完存	18.6	7.5
119 2区	弥生後期	高环	脚部 1/4	17.1	5.1
120 2区	古墳前期	器台	脚部 1/6	12.2	5.5
121 2区	古墳前期	高环	环部 1/6	21.8	4.5
122 2区	古墳前期	高环	环部 1/8	27.6	3.4
123 2区	古墳前期	高环	环部 1/8	27.4	3.6
124 2区	弥生後期	高环	口縁部 1/2	29.4	5.1
125 2区	弥生後期	高杯	脚溝のみ完存	13.2	9.8
126 2区	弥生後期	高环	脚部ほぼ完存	11.0	8.2
127 2区	古墳前期	脚部	脚溝のみ完存	10.2	4.9
128 2区	弥生後期	高环	脚部 2/3		8.8
129 2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～頸部 1/6	10.4	4.6
130 2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁部 1/3	16.2	4.8
131 2区	弥生中期	甕	口縁～頸部	14.6	4.2
132 2区	弥生後期	甕	口縁～体部 1/4	15.4	6.6
133 2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部 1/3	16.8	9.5
134 2区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部 1/3	14.8	11.8
135 2区	古墳前期	壺	頸～底部 4/5	7.6	14.6
137 2区		手捏ね	底部のみ完存	4.0	2.6
138 2区	古墳前期	底部	底部のみ完存	3.6	5.0
139 2区		壺	口縁～底部 1/2	6.8	6.3
139 2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	口縁～底部 2/3	10.8	6.1
140 2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存	3.1	5.1
141 2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部ほぼ完存		4.9
142 2区	弥生終末～古墳初頭	甕	底部のみ完存	2	7.8
143 2区	弥生	底部	底部のみ完存	2.0	10.4
144 2区	古墳前期	高环	环部 1/4	24.1	4.8
145 2区	弥生終末～古墳初頭	鉢	口縁～底部 1/2	16.6	7.5
146 2区	古墳前期	鉢	口縁～底部 1/2	25.0	11.5

SD201出土遺物

(土器)

図番調査区	時期	器種	現存部位・現存率	径	器高
167 1区	弥生終末～古墳初頭	小型鉢	完形品	5.5	3.3
168 1区	古墳前期	小型丸底壺	体～底部のみ完存		5.1
169 1区	弥生中末期	壺	口縁部 1/5	12.8	1.2
170 2区	古墳初頭	壺	口縁部 1/8	13.8	2
171 2区	弥生中末期	甕	口縁部 1/8	10.6	3.2
172 1区	弥生後期	甕	口縁部 1/7	17.8	2.7
173 1区	弥生終末～古墳初頭	甕	頸～体部 1/4	10.4	7.1
174 1区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部 1/6	13.4	5.2
175 1区	弥生中期	壺	口縁～頸部 1/5	10.6	5
176 1区	弥生終末	甕	口縁～体部 1/8	11.1	6.2
177 1区	弥生後期	甕	口縁部 1/8	16	3
178 1区	古墳前期	甕	口縁～体部 1/4	15.8	4.8
179 1区	弥生前期	甕	口縁部 1/8	17.6	7.1
180 1区	弥生中期	壺	口縁～頸部 1/6	21.6	7.7
181 1区		底部	底部 1/2	9.2	5.8
182 1区	弥生終末～古墳初頭	高环	环部 1/8	33.2	6

成形・文様・調整(外面/内面)	色調(外面/内面)	備考	図番
/ハケ	褐色/明褐色	中心から上方へ風車状にハケを	113
ナデ/ナデ・指頭圧	褐灰白色/明赤黄褐色		114
ハケ・タタキのちナデ/ナデ	黄白色/暗褐色		115
タタキ後ハケ後ミガキ/ 指頭圧・ハケ	黄褐色/黄褐色		116
タタキのちナデ/ナデ 不明/不明	黄褐色/明褐色		117
ハケ・ナデ/ハケ 不明/ハケ	灰褐色/灰褐色	脚部欠損後に穿孔	118
ハラミガキ/ナデ/ナデ 不明/ハケ	赤褐色/明赤灰色		119
ナデ・ハラミガキ/ナデ ナデ後ミガキ/ハケ後ミガキ/ミガキ	黄褐色/黄灰色		120
指頭圧/ハケ	明赤黃色/赤褐色		121
ハケ・ナデ/ハケ・ナデ 指頭圧/ミガキ・ハケ	黄褐色/明赤灰褐色		122
ナデ/ナデ ハケ・タタキ/ハケ	明赤黄褐色/赤灰白色		123
タタキ/ハケ	黄褐色/黄白色		124
刻目文・指頭圧・不明 ハケ/不明	黑色/黄灰色	内面に接合痕	125
タタキ/ハケ・指頭圧	明灰褐色/赤褐色	吉備地方からの搬入品	126
ナデ・ハケ・タタキ後ハケ/ハケ・ナデ ハケ/ハケ・ナデ・指頭圧	黑色/黄褐色		127
指頭圧/指頭圧	明赤黄褐色/赤灰白色		128
ナデ/ナデ・ハケ ハケ・ナデ/ナデ	暗褐色/黄灰白色		129
ナデ/ハケ タタキ/ハケ・ナデ	黄褐色/明褐色		130
ハケ/ハケ・ナデ 指頭圧	暗褐色/黄褐色	吉備地方からの搬入品	131
タタキ/ハケ	黑色/黄褐色		132
ナデ・ハケ・タタキ後ハケ/ハケ・ナデ ハケ/ハケ・ナデ・指頭圧	黑色/褐色		133
指頭圧/指頭圧	明白褐色/黄褐色		134
ナデ/ナデ・ハケ ハケ・ナデ/ナデ	暗褐色/黄灰白色		135
ナデ/ハケ タタキ/ハケ・ナデ	黄褐色/赤灰褐色		136
タタキ後ハケ/ハケ タタキのちハケ/ハケ・指頭圧・ナデ	赤褐色/赤褐色		137
ハケ/ナデ ナデ・ハケ・ミガキ/ナデ・ミガキ タタキ・ナデ/ハケ・ヘラミガキ	黄褐色/赤褐色		138
ハケ/ナデ	明黄褐色/明灰色		139
タタキ/ハケ/ハケ ハケ/ナデ	灰褐色/赤灰褐色	底部に穿孔(吊して使用?)	140
タタキ/ハケ・ナデ	赤褐色/赤灰褐色		141
タタキ後ハケ/ハケ タタキのちハケ/ハケ・指頭圧・ナデ	黄褐色/褐色		142
ハケ/ナデ ナデ・ハケ・ミガキ/ナデ・ミガキ タタキ・ナデ/ハケ・ヘラミガキ	灰褐色/黄褐色		143
ハケ/ナデ	明黄褐色/明灰色		144
タタキ・ナデ/ハケ・ヘラミガキ	灰褐色/黄褐色	底部中心付近を円形になれる	145
	黄白色/黄灰色		146

成形・文様・調整(外面/内面)	色調(外面/内面)	備考	図番
タタキ/	黄褐色/黄褐色	口縁端部に焼成時の亀裂	167
ハケ/指頭圧・ナデ・ハケ	灰褐色/明褐色		168
口縁端部にハケでは不明 不明/不明	黄褐色/黄灰色 赤褐色/赤灰色		169
退化四線(ナデ)・竹管文	灰褐色/灰褐色		170
	暗褐色/暗褐色	下川津B類	171
タタキ・タタキ後ハケ/ハケ ハケ/ハケ・ナデ	灰褐色/褐色		172
指頭圧・ハケ/指頭圧・ハケ	明黄褐色/灰褐色		173
タタキ後ハケ/ハケ 不明/不明	赤褐色/赤灰褐色 明赤灰色/黒灰色		174
ハケ・指頭圧/ハケ・ナデ	黄灰褐色/明灰褐色		175
刻目文・押圧凸帯文・板材の庄底・ヘラ描沈 識文・ナデ/ナデ・ハケ	明赤灰色/灰褐色		176
波状文・ハケ・刻目凸帯文/不明 ハケ/ナデ	灰褐色/灰褐色		177
ナデ後ミガキ・ハケ後ナデ/ミガキ	黄褐色/黄褐色		178
			179
波状文・ハケ・刻目凸帯文/不明 ハケ/ナデ	明黄褐色/灰褐色		180
ナデ後ミガキ・ハケ後ナデ/ミガキ	灰褐色/灰褐色		181
	黄褐色/黄褐色		182

SD202出土遺物

(土器)

図番調査区	時期	器種	現存部位・現存率	径	器高
183 1区	中世・土師器	皿	口縁～底部	6.2	1.9
184 1区		底部	底部 2/3	4.2	2.6
185 1区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部 1/4		2.8
186 1区	古墳前期	甕	口縁部 1/8	16.8	3.7
187 1区	古墳前期	甕	口縁部 1/6	16.8	2.8
188 1区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁部 1/8	17.2	5.8
189 1区		壺	口縁部 1/6	12	2.5
190 1区		甕	口縁部 1/6	15	4.9
191 1区	SC後半	环	身 1/6	12.2	4
175 1区	弥生中期	壺	口縁～頸部 1/5	10.6	5
176 1区	弥生終末	甕	口縁～体部 1/8	11.1	6.2
177 1区	弥生後期	甕	口縁部 1/8	16	3
178 1区	古墳前期	甕	口縁～体部 1/4	15.8	4.8
179 1区	弥生前期	甕	口縁部 1/8	17.6	7.1
180 1区	弥生中期	壺	口縁～頸部 1/6	21.6	7.7
181 1区		底部	底部 1/2	9.2	5.8
182 1区	弥生終末～古墳初頭	高环	环部 1/8	33.2	6

SX201出土遺物

(土器)

図番調査区	時期	器種	現存部位・現存率	径	器高
193 2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存	5.2	3.1
194 3区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存	1.5	2.7
195 3区	古墳前期	壺	口縁～頸部 1/2	16.6	6.3
196 2区	古墳前期	甕	口縁～頸部 1/2	15.6	5.8
197 3区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部 1/4	15.2	5.3
198 3区	古墳前期	高环	环部 1/6	22.8	4.3
199 2区	古墳前期	高环	环部 1/6	23.6	3.1
200 2区	古墳前期	高杯	脚部 1/2		8.7

SR202出土遺物

(土器)

図番調査区	時期	器種	現存部位・現存率	径	器高
208 3区	古墳前期	小型丸底壺	頸部～体部 1/4		6.3
209 3区	古墳前期	甕	口縁部 1/2	18.4	4.3
210 3区	古墳前期	壺	口縁部 1/4	15.3	4
211 3区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部 1/2	14.4	9.8
212 3区	古墳前期	甕	口縁～体部 1/4	14.4	6.4
213 3区	弥生終末～古墳初頭	甕	口縁～体部 1/4	12.7	8.9
214 3区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部ほぼ完存	14.8	17.6
215 3区	古墳前期	壺	完形品	10.4	12.9
216 3区	古墳前期	壺	頸～底部 1/2		13.9
217 3区	古墳前期	高环	口縁部 1/8	13.4	3.6
218 3区	古墳前期	高环	环部 1/6		
219 3区	弥生終末	高环	环部 1/8	21.9	5.3
220 3区	古墳前期	高环	环部 1/8	18.6	3.9
221 3区	古墳前期	高环	脚部ほぼ完形	13	7.3
222 3区		高环	脚部 2/3	12.8	7.1
223 3区	古墳前期	高环	脚部 1/2	13.2	8.1
224 3区		高环	脚部のみ完存	12.6	7.4
225 3区		高环	脚部 2/3	13.6	8.8
226 3区		底部	底部ほぼ完存	5.4	3.2
227 3区	弥生終末～古墳初頭	鉢	口縁～底部 4/5	21.6	9.9

成形・文様・調整(外面/内面)	色調(外面/内面)	備考	図番
不明/不明	色		183
ハケ/不明	明黄赤褐色/褐灰色		184
タタキ/	明黄白色/灰褐色		185
指頭圧・ハケ後ナデ	黄灰褐色/明赤褐色		186
ナデ/ナデ・ハケ	灰褐色/灰褐色		187
ハケ・タタキ後ハケ・タタキ/ハケ	灰褐色/灰褐色		188
ハケ/不明	明灰褐色/明灰褐色		189
ハケ/ハケ	黄灰白色/黄灰色		190
回転ナデ/回転ナデ	灰色/灰色		191
指頭圧・ハケ/指頭圧・ハケ	赤褐色/赤灰褐色		175
タタキ後ハケ/ハケ	黄灰褐色/明灰褐色		176
不明/不明	明赤灰色/灰黑色		177
ハケ・指頭圧/ハケ・ナデ	灰褐色/黄灰色		178
轍文・ナデ/ナデ・ハケ	灰褐色/灰褐色		179
波状文・ハケ・刻目凸帯文/不明	明黄灰色/灰褐色		180
ハケ/ナデ	灰褐色/灰褐色		181
ナデ後ミガキ・ハケ後ナデ/ミガキ	黄灰色/黄褐色		182

成形・文様・調整(外面/内面)	色調(外面/内面)	備考	図番
タタキ・ハケ/ハケ	灰褐色/黄灰白色		193
タタキのちナデ/ナデ・ハケ	黄灰色/黄白色		194
ハケ/ハケ	赤褐色/赤褐色		195
ナデ・ハケ/ナデ	黄灰色/黄黄色		196
タタキ後ハケ/ハケ	明灰褐色/明赤褐色		197
ナデ/ナデ	赤褐色/赤褐色		198
指頭圧のちハケ・ヘラミガキ/指頭圧・ハケ・ヘラミガキ	黄褐色/灰褐色		199
ハケ・ナデ/	赤橙色/黑赤色	内面に絞り目	200

成形・文様・調整(外面/内面)	色調(外面/内面)	備考	図番
ナデ/ハケ	黒色/灰褐色		208
ナデ/ハケ/ナデ	黒褐色/暗褐色	塗入品	209
ナデ/ナデ	黑灰色/灰褐色		210
ハケ・タタキ/ハケ	黄灰色/明灰褐色		211
不明/不明	灰褐色/灰褐色		212
ハケ・タタキ/ハケ・ナデ	明黄赤褐色/褐灰色	内面に接合部	213
ナデ・タタキ後ハケ/ナデ	黒色・明赤褐色/ 灰褐色		214
指頭圧後ナデ/ナデ・ヘラケズリ・指頭圧	暗灰・明赤灰褐色/ 暗灰色		215
不明/	褐色/褐灰色	内面に炭化糞付着	216
ナデ/ナデ	赤褐色/黄橙色		217
ナデ/ (ナデ・ハケ)	暗赤灰色/赤灰色		218
不明/不明	黄灰褐色/灰黄褐色		219
不明/不明	赤褐色/赤橙色		220
指頭圧後ハケ・ナデ/ハケ	暗黄灰色/黄褐色	内面に絞り目が顯著に残る	221
ナデ/ナデ	灰褐色/灰褐色		222
ナデ/ナデ	暗褐色/赤褐色		223
ナデ/ナデ	赤褐色/赤褐色	内面に絞り目が顯著に残る	224
ナデ/ナデ	灰褐色/灰褐色	内面に絞り目	225
指頭圧/不明	明灰褐色/明灰褐色		226
タタキ/ハケ	明黄褐色/褐色		227

SD101出土遺物

(土器)

図番調査区	時期	器種	現存部位・現存率	径	器高
228 3区		須恵器・壺	口縁～頸部 1/8	14	4
229 3区			口縁部 1/8	11.8	4
230 3区		須恵器・环	蓋 1/2		1.7
231 3区	SC後半	身	身・口縁部 1/6	18.6	3
232 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～体部 1/2	11.8	9.5

VI層出土遺物

(土器)

図番調査区	時期	器種	現存部位・現存率	径	器高
234 3区	弥生前期	壺	口縁～頸部 1/4	8.8	5.5
235 3区	弥生中期	壺	口縁～頸部 1/6	11	4.4
236 3区	弥生前期末	壺	口縁部 1/6	18.6	3.1
237 3区	弥生前中期	壺	口縁部 1/6	20.4	2.6
238 3区	弥生前期	壺	口縁部 1/6	24.8	2.9
239 3区	弥生前期	壺	口縁部 1/6	21.8	4.7
240 3区	弥生前期	壺	口縁部 1/60	16.9	1.3
241 2区	古墳前期	壺	口縁部 1/6	22.1	2.2
242 3区	弥生前期	壺	口縁部 1/6	25.4	3
243 3区	弥生前中期	壺	頸部 1/4		7.8
244 3区	弥生前期	壺	頸部 1/10		4.4
245 3区	弥生終末	高环	環部 2/3	15.6	4.8
246 3区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部 1/3	9.6	7
247 3区		底部	底部 2/3	8.3	2.3
248 3区		底部	底部のみ完存	6.2	5.2
249 3区		底部	底部のみ完存	5.3	6

III層出土遺物

(土器)

図番調査区	時期	器種	現存部位・現存率	径	器高
250 1区	古墳前期	壺	口縁部 1/8	16.2	1.8
251 1区	弥生後期	壺	口縁部 1/6	15.8	2
252 1区	弥生後期	壺	口縁部 1/8	12.8	2.5
253 2区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁部 1/8	11.4	2.3
254 3区		鉢	ほぼ完形	4.3	4.3
255 3区	古墳前期	高环	脚部 1/4		6.8
256 3区	古墳前期	小型丸底壺	ほぼ完形		6.9
257 3区	古墳前期	小型丸底壺	頭～底部 完形		6.9
258 3区	弥生終末～古墳初頭	壺	体～底部のみ完存		
259 1区	弥生中前期	壺	口縁部 1/8	17.8	3.1
260 1区	弥生終末～古墳初頭	壺	口縁～頸部 1/2	15.6	6.4
261 2区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存		9.6
262 1区	弥生終末～古墳初頭	底部	底部のみ完存		12.5

II層出土遺物

(土器)

図番調査区	時期	器種	現存部位・現存率	径	器高
273 3区	17世紀	碗	口縁部 1/8	11.4	2.5
274 1区	5世紀後半	須恵器・壺	口縁部 1/12	25	1.6
275 3区	17世紀	陶磁器・环	口縁部 1/5	11.4	4.7
276 1区	13世紀末	瓦器・碗	口縁部 1/12	16.1	4
277 3区	11C	土師器・碗	底部 1/4	6.2	1.7
278 1区	13世紀末	瓦器・碗	底部のみ完存	3.2	0.6
279 3区	14世紀	碗	口縁部 1/8	18.4	3.7
280 3区	中世	土師器・环	底部 1/2	6.5	1.1
281 3区	中世	土師器・环	口縁～底部 1/4	6	3.3
282 3区	中世	土師器・环	底部 1/4	6.2	2.7
284 2区	近世	陶器・碗	底部	5.8	2.4
284 1区	17世紀	陶磁器・底部	底部ほぼ完存	6.4	1.8

成形・文様・調整(外面/内面)	色調(外面/内面)	備考	図番
回転ナデ/回転ナデ	黒色/暗黃灰色		228
回転ナデ/回転ナデ	黒灰色/黒灰色		229
回転ナデ/回転ナデ	暗灰色/青灰色		230
回転ナデ/回転ナデ	青灰色/青灰色		231
タタキ/ハケ・指頭圧・ナデ	明黄褐色/明黄灰褐色		232

成形・文様・調整(外面/内面)	色調(外面/内面)	備考	図番
ナデ・ハケ・ヘラ描沈線文・ナデ・ハケ	赤褐色/灰褐色		234
不明/ハケ	明灰黄色/黄灰色		235
刻目文・ヘラ描沈線文/ハケ	暗褐色/褐色		236
刻目文・ヘラ描沈線文/	赤褐色/褐色		237
刻目文・ヘラ描沈線文・ナデ	黄灰褐色/明黄褐色		238
刻目文・ヘラ描沈線文(3条) /	褐色/赤褐色		239
刻目文/	褐色/赤灰褐色		240
指頭圧・ハケのちナデ/ハケ・ナデ	明灰褐色/黄灰色		241
刻目文・沈線文・指頭圧/ナデ	黄灰褐色/灰褐色		242
ハケ・ヘラ描沈線(5条) /ハケ	赤褐色/赤褐色		243
凸彫文/	褐色/褐色		244
ナデ/ナデ・ハケ	褐色/褐色		245
タタキ後ハケ(ナデ?) / 指頭圧	黄灰色/黄灰褐色		246
ヘラ描沈線文・指頭圧/指頭圧	灰褐色/灰褐色		247
不明/不明	赤褐色/明赤灰褐色		248
ハケ/ハケ	暗灰褐色/灰黄色		249

成形・文様・調整(外面/内面)	色調(外面/内面)	備考	図番
ナデ・ハケ/ハケ	褐色/褐色		250
不明/ナデ	褐色/明赤褐色		251
ナデ・ハケ/ナデ	明褐色/明褐色		252
ハケ/ハケ	黑色/灰褐色		253
不明/ケズリ	黄灰褐色/黄灰褐色		254
不明/ケズリ	明褐色/灰褐色		255
ナデ/ハケ	灰褐色/灰褐色		256
ナデ/ハケ・指頭圧	赤褐色/赤褐色	口縁部欠損後再利用か?	257
タタキのちハケ/不明	灰褐色/灰黄色		258
ナデ/ナデ	灰褐色/灰褐色		259
指頭圧・ハケ・タタキのちハケ/ハケ	灰白色/灰黄白色		260
タタキのちハケ/	明灰黄色/明灰黄色		261
タタキ後ハケ/ハケ	黄灰白色/明灰白色		262

成形・文様・調整(外面/内面)	色調(外面/内面)	備考	図番
回転ナデ/回転ナデ	灰白色/灰白色	肥前焼	273
回転ナデ/回転ナデ	黒灰色/灰色		274
回転ナデ/回転ナデ	綠灰色(自然釉)	肥前焼	275
回転ナデ/回転ナデ	黒灰色/黒灰色	和泉産	276
不明/不明	黄灰色/黄灰色		277
回転ナデ/回転ナデ	黒灰色/黒灰色	和泉産・見込みに暗文	278
不明/不明	灰白色/灰白色		279
回転ナデ/回転ナデ	赤褐色/赤褐色		280
回転ナデ/回転ナデ	灰褐色/黄灰色	底部回転糸切り	281
回転ナデ/回転ナデ	灰褐色/灰白色		282
回転ナデ/回転ナデ	褐色/暗赤褐色	唐津焼?・外面に自然釉	284
高台削りだし/砂目積底	暗オリーブ灰色(釉) ・黄灰白色	唐津焼	284

調査区分	時期	器種	現存部位・現存率	径	器高
285 3区	古代	瓦			

4区出土遺物

(土器)

調査区分	時期	器種	現存部位・現存率	径	器高
287 4区	古墳前期	長頸壺	頸部 1/2	4.8	5.9
288 4区		須恵質・鍋	口縁部 1/8	11.8	5.7
289 4区	弥生終末～古墳初頭	鉢	口縁部 1/6	26	5.5
290 4区	中世・土師器	壺	底部 1/2	7.2	1.5
291 4区	中世・土師器	壺	口縁部 1/20	15.5	2.3
292 2区		器台	脚部 1/8	16	3.6

(石器)

番号	遺構名	器種	石種	製法	全長	全幅	最大厚	備考
147	SR201	石包丁	緑色片岩	磨製	(6.3)	4.9	0.7	
148	SR201	石包丁	緑色片岩	磨製	(7.8)	4.1	0.7	中央付近に孔2つ
149	SR201	石包丁	頁岩	打製	8.3	4.2	0.9	
150	SR201	石包丁	頁岩	打製	9.6	5.0	1.0	木製品
151	SR201	扁平片刃石斧	頁岩	磨製	5.0	4.3	1.1	
152	SD102	扁平片刃石斧	頁岩	磨製	(5.1)	(1.5)	1.1	
233	SD101	石包丁	頁岩	打製	8.9	6.0	1.0	

木器観察表

番号	遺構	器種	木取り	径	現存高	現存長	全幅	最大厚	備考
153	SR201	木製容器	半削材・芯無し	46.8	11.9				
154	SR201	両端加工棒	皮付・丸木材	3.8		149.7			
155	SR201	木製織具	半削材・芯無し		78.1	7.9	2.9		
156	SR201	木製織先	板目板		24.1	9.0	1.3		
157	SR201	木製織	板目板・3足(一部欠損)		37.1	12.6	1.3	3足(一部欠損)	
159	SR201	有孔板材	板目板・芯なし		21.2	8.5	1.7		
160	SR201	有孔板材	板目板・芯無し		56.8	13.3	2.1		
161	SR201	有孔板材	板目板・芯無し・皮無し		69.8	9.9	2.2		
162	SR201	有孔板材	板目板		63.6	7.7	1.9		
164	SR201	有孔板材	板目板・芯無し		62.7	5.5	1.0		
165	SR201	板材	板目板・芯無し		57.8	6.1	1.8		
166	SH201	加工木	芯持・丸木材・皮無し		48.1	15~20			
201	SX201	木製容器	皮無し・丸木材	11.6	4.7				
202	SX201	木製構造	丸木材・皮無し			10.9	11.1		網を欠損
203	SX201	木製構造	皮なし・丸木材	5.9~7.6		21.8			
204	SX201	木製構造	皮なし・丸木材	7.1		28.2			
205	SX201	木製織先?	板目板・芯無し		28.3	6.6	1.4		
206	SX201	木製織先	板目板・芯無し		61.7	1.8			
207	SX201	木製織先	板目板		19.7	25.8	2.1		
263	III層	有孔板材	板目板・芯なし		9.1	5.9	0.9		
264	III層	板材	板目板・芯なし		11.8	12.2	2.0		
285	III層	有孔板材	板目板・芯なし		21.2	9.4	1.6		織具の一部か?
286	SR202	板材	板目板・芯無し		45	4.8	1.7		
267	III層	田下鉢?	板目板・芯無し		31.6	3.5	0.8		
268	SR202	加工木	板目板・芯無し		21.9	4.7	1.0		
269	SR202	田下鉢?	板目板・芯なし		34.0	3.5	0.9		
270	SR202	板材	板目板・芯なし		33.8	6.3	3.9		
271	SD202	有孔板材	板目板・芯なし		67.2	9.8	2.1		
272	SD202	有孔板材	板目板		69.4	8.8	1.8		丸に皮を通す

成形・文様・調整(外面／内面)	色 調(外面／内面)	備 考	図番
布目／指頭圧・布目	黄灰色／黄灰色		285

成形・文様・調整(外面／内面)	色 調(外面／内面)	備 考	図番
ナデ?／不明	赤褐色／赤褐色		287
回転ナデ／回転ナデ・沈線3条	黒色／黒灰色		288
タタキ?／ミガキ	黄灰褐色／黄灰色		289
回転ナデ／回転ナデ	灰褐色／灰褐色	底部回転糸切り	290
(回転ナデ／回転ナデ)	明黄灰褐色／ 明黄灰褐色		291
不明／不明	赤褐色／赤褐色	裾部に穿孔	292

第IV章 おわりに

介良遺跡として囲まれた範囲は広範に及び、また調査のなされていない箇所がほとんどである。さらに、全体が今回の調査区のような河川遺構であるとは考えられず、そうした意味から介良遺跡全体を特色づけることは困難を極める。それを踏まえた上で中で今回の調査区の位置づけを考えるならば以下のようなことがいえよう。

介良遺跡の中心をなす遺構は自然河川であり、調査区に隣接して南流する「介良川」の旧河道(SR201)である。調査区内におけるSR201の川筋は2・3区の境界付近に現れ西流、2区の中程で緩やかに東へ向きを変えて1区の中程から調査区外へ逃げる。流速は遅く川底には葦か何かの植物が繁茂していたようだ。その川筋の変換点に弥生時代終末～古墳時代初頭の遺物の出土が集中している。破片も多いが、一部を欠損したのみの土器が多く、後述するような河川祭祀終了後の投棄の可能性が考えられる。また、木製品も多く出土していることなどからこの付近に不要物を捨てる「ゴミ捨て場」のような場所が存在していたことも推測できる。この付近にこの時代の集落遺跡は知られていないが、地形的に本調査区よりも北もしくは東方、さほど遠くない場所に立地していたものと思われる。ところで、調査区内においても北へ行くに従って少なからず削平され、その土をその西側に盛っているそうである。こうしたことから考えれば集落はかなり削平され、場合によつては消滅してしまっている可能性もある。

土器以外では木器、石器には農耕具の出土が多いが、漁具の出土が極端に少なく、漁具の可能性のある加工木が1点見られるのみである。昨年度の調査における遺物の出土状況と遺物の傾向の詳細は不明であるが、場合によっては別の集落の存在を考えなければならなくなろう。

SR201に接続される流路がSR202である。SR202の特色は遺物にある。遺物の出土が南端付近に集中していることは述べたとおりであるが、その組成が特徴的である。高壺がもっと多く、圓化し得た20点中、壺部4点、脚部5点の計9点(45.0%)であり、壺と脚で1個体としても35.7%にのぼる。さらに底部に炭化米の付着した丸底壺、完形の丸底壺や1点のみではあるものの小型丸底壺の存在は付近における祭祀を想起させるものである。木製品もそれに関連したものかもしれない。また、この時、投棄された土器群も来年度以降検出されるかもしれない。

SR201から派生する流路はSD201であるが、これは人工物であろう。遺物量も少ない。西方に水を引いたものと考えられ、遺物量も少ない。木製品や流木の集中する箇所が存在することから考えて元来はもっと深く、後世に削平されているものと推定される。

SD201に接続する流路がSD202であるが、これも北へ行くほど削平され、1区北端付近では床面が残る程度である。SD201との合流部で木製品や流木が多く列をなして出土しており、深い流路であったことが伺える。

SX201はその中の流路を通じてSR201から水を引いて何かを行った「作業場」のようなものであつたのであろう。枝を払ったのみの丸木材や1mほどの長さの板材が杭を用いて固定されている。遺物にも完形品の木製品が多く見られる。

緩やかに流れるこの介良川とその河原を祭祀や生活に利用した人々は、これが少しずつ流路を移

動し、湿地帯と化して行くに従い、その場所を変えていったと思われる。集落などのように人が常駐したわけではなかろうが、様々な形で人に大きく関与し、いわば生活に密接した場所であったといえよう。

介良遺跡は自然河川を主とする遺跡である。その流れは土層堆積の状況からもきわめて遅かったとみえ、そのため出土遺物もほぼ原位置を保っていると考えてもよいと思われる。

このような環境下における祭祀の類例として真っ先に中村市・具同中山遺跡群を挙げなくてはならない。5世紀代のものであるが、ここでは祭祀構構と、その後、自然河川に投げ込まれた土器群が見つかっている。この具同中山遺跡群と介良遺跡の相通じる点は河川の流速が遅く、遺物がほぼ原位置を保っていることにある。中村市と高知市東端という約150km離れた地点においても同様な祭祀行為が行われていたことは容易に想像できる。

介良周辺の祭祀の一例としては、中世におけるものが知られる。これは朝嶺神社背後の「おあるいは池」の中に据えられた古常滑焼の甕を用いたものであった。常に水が貯められ、早天続きの時にはこの水を少し動かして祈ったという。また、神社の祭礼前後の丑の刻に神池の水で米粥を炊くなどを行ったという。これらは農耕の神事に関連のあるものと見られている。これが直接介良遺跡で行われたものとは関係なかろうが、それに似たようなことがなされていたのではないかと思われる。

参考文献

- 松田直則、山崎正明 他『具同・中山遺跡群』(財)高知県埋蔵文化財センター 1997.3
岡本健児 「介良の考古学」『介良』高知市教育委員会 1989
出原恵三 「祭祀発展の諸段階—古墳時代における水辺の祭祀—」『考古学研究』144号 1990.3

写 真 図 版



介良遺跡遠景（北より）



調査前の風景（北東より）



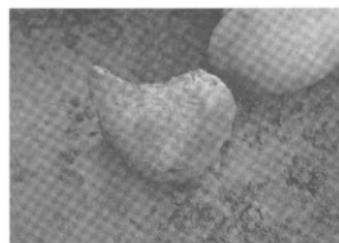
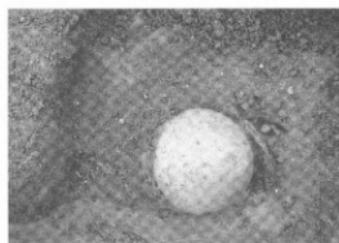
土層（2区東壁）



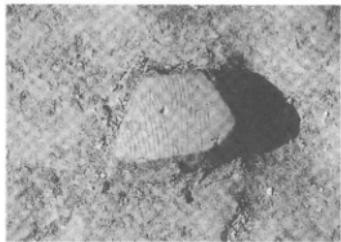
土層（2区南壁）



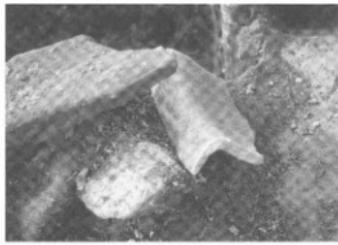
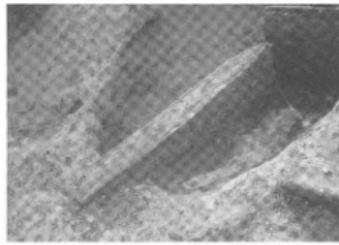
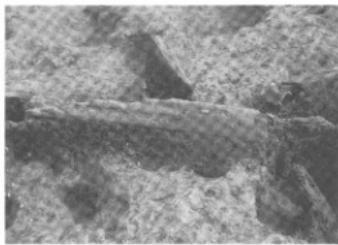
完掘（北東より）



S R201遺物出土狀況



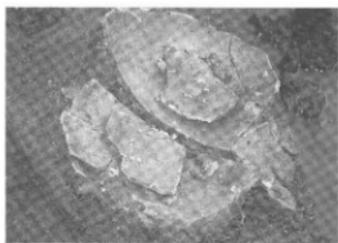
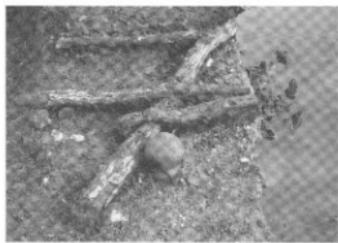
S D201遺物出土狀況



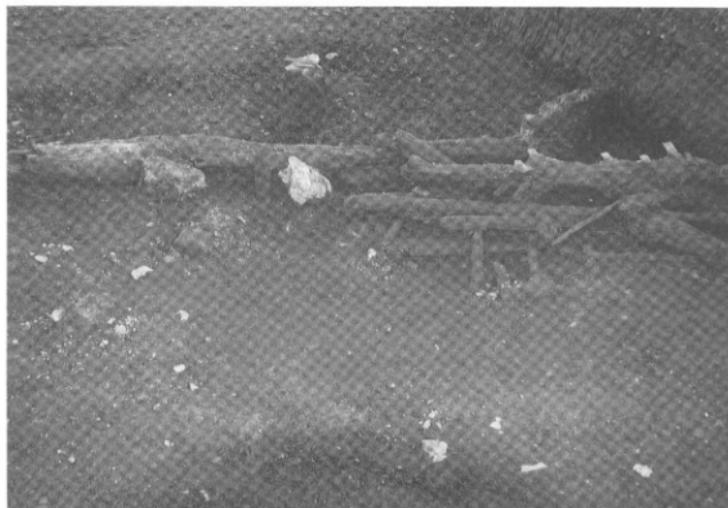
S D 202遺物出土狀況



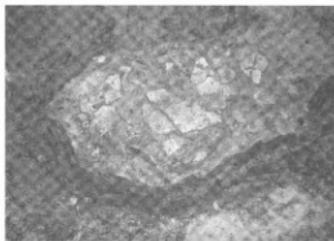
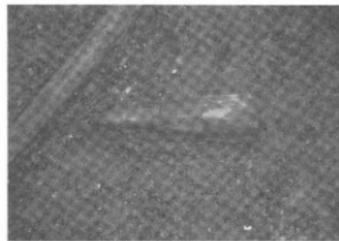
S R202土層



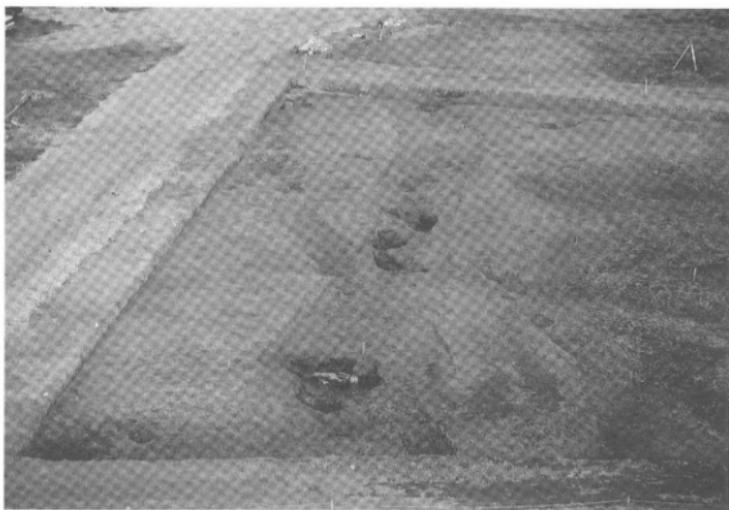
S R202遺物出土狀況



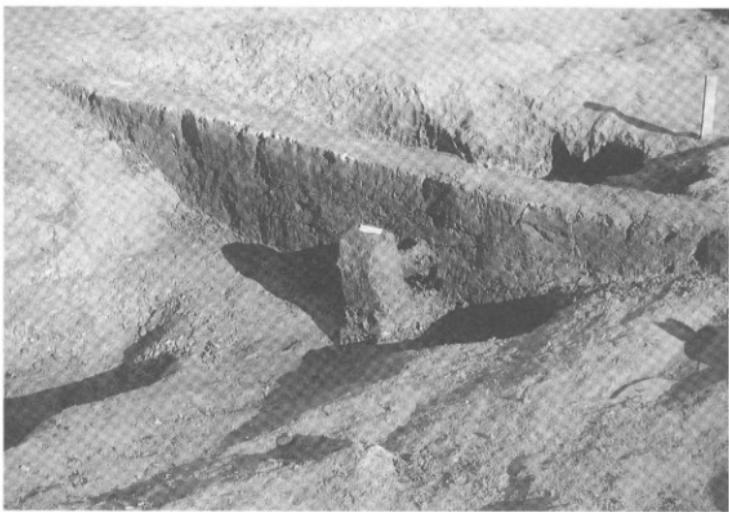
S X201全景（南西より）



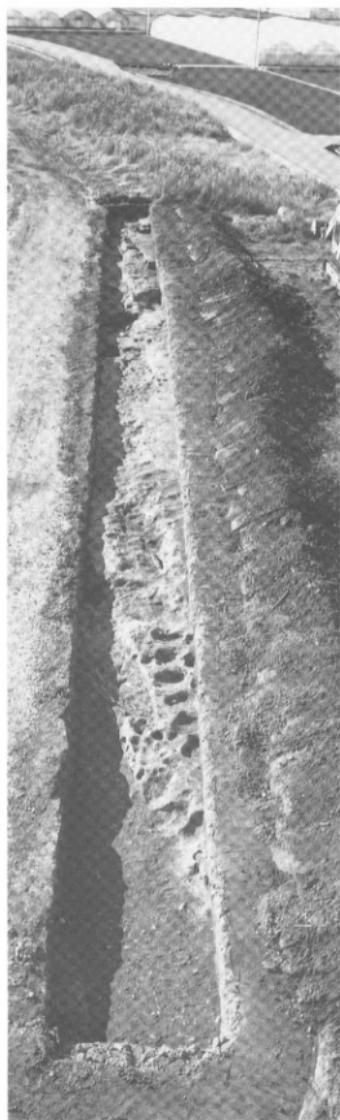
S X201遺物出土状況



S D101・102交差部



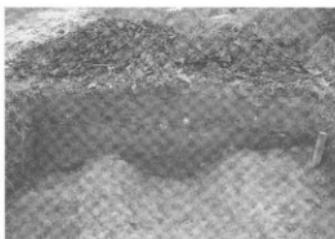
S D101土層（2区）



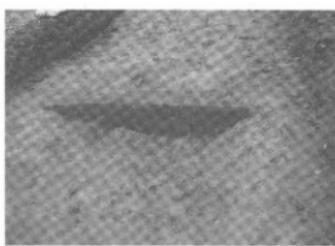
4区全景（北より）



4区土層（東壁）



4区土層（南壁）



4区小流路



石組み



調査風景



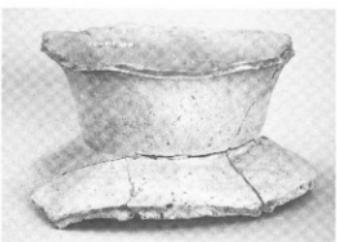
整理作業風景



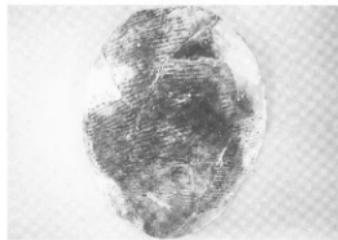
調査に参加された方々



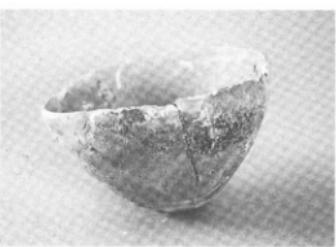
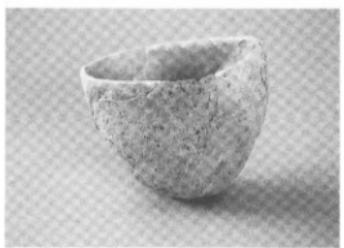
S R201出土遺物（1）



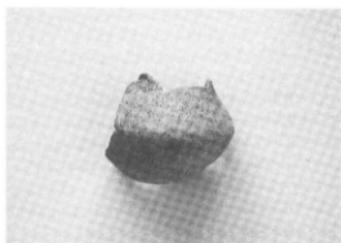
S R201出土遺物（2）



SR201出土遺物（3）



S R201出土遺物（4）



SR201出土遺物（5）